



# 滄浪



水泳部創立

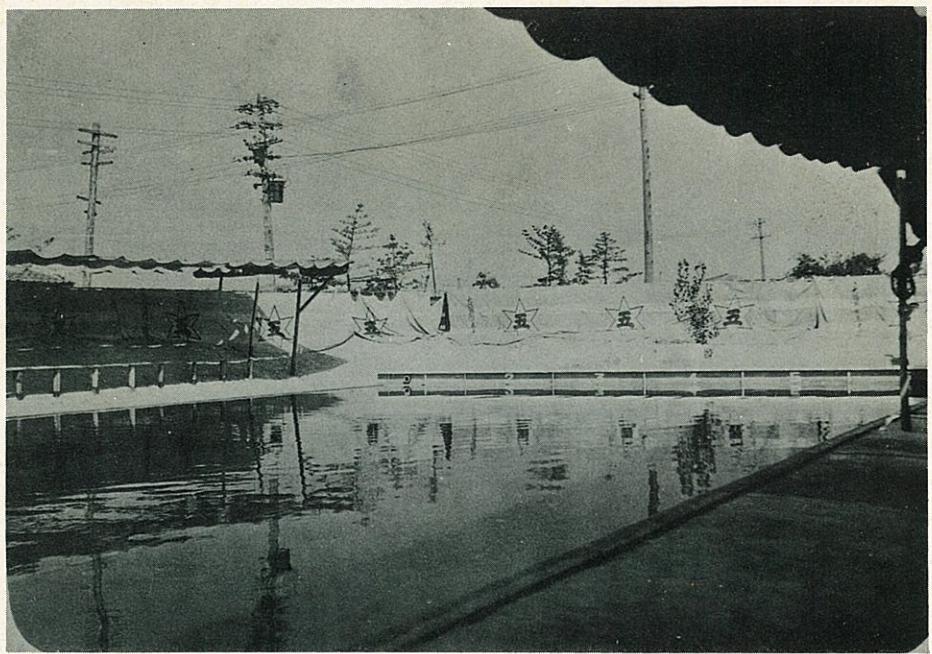
50周年記念誌

桃陰水泳クラブ

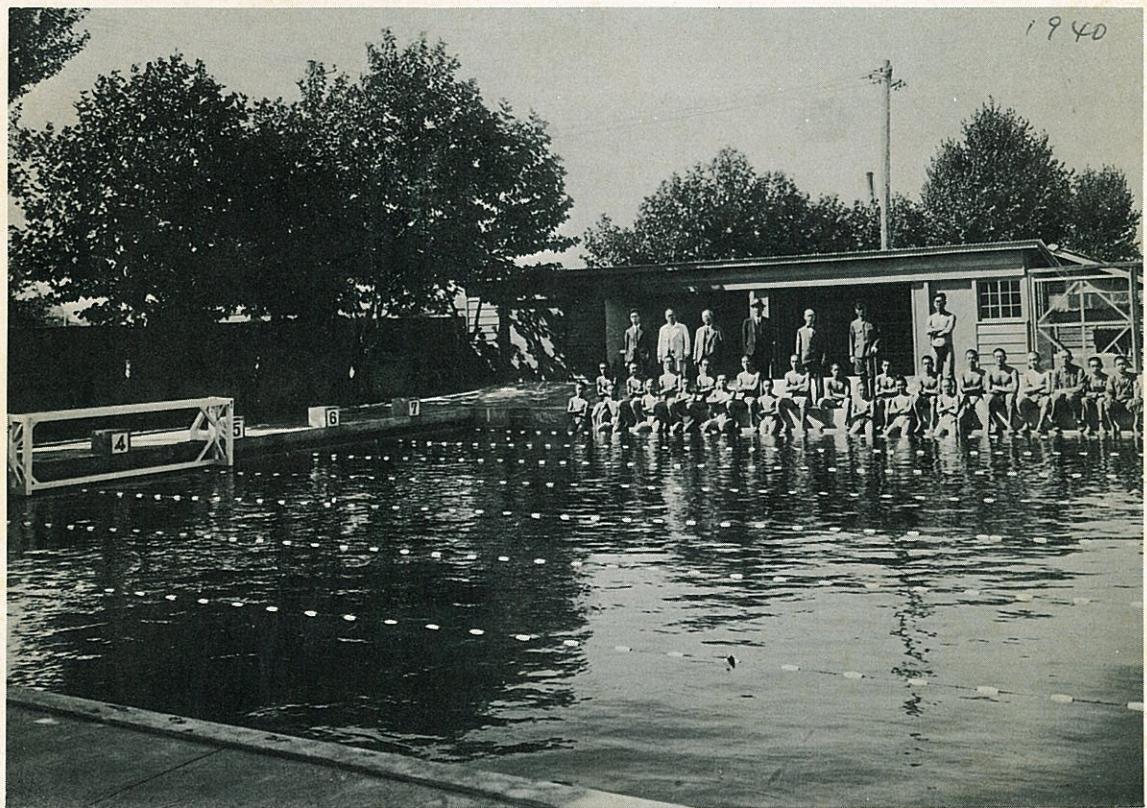
1972

滄浪は、屈原の楚辭の漁父の辞の中に出て来る「滄浪の水清まば、以て吾が纓えいを濯あらふ可く、滄浪の水濁じよらば、以て吾が足を濯あらう可し」より来ている。楚辭は、昨年田中首相が中国へ行つた時、毛澤東が之を送つたといふことであるが、どう云う意味で、毛が田中に之を送つたのか、田中も又何と思つて之を貰つて帰つたのか、その意味も尋ねないで黙つてもらつて来たことが、私には訳が判らない。

世の中がきれいな時、自分が容れられるような世の中ならば、大いに冠を正してやつて見よう。然らざる時はさつさと退居してわが道を守つてやつて行く、と云う意味で、褒貶ほうちんは人があり、行藏は我にあり、と云う処です。

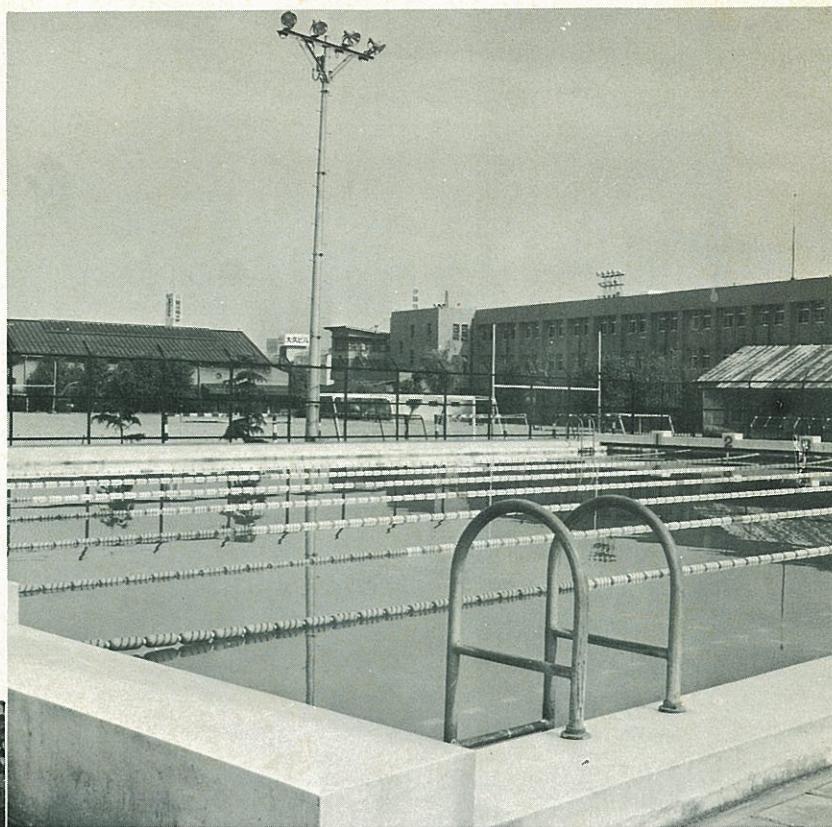


▲旧プール25米6コース。当時の天中生自らの手により大正13年7月  
竣工す。写真はプール開きの当日のプール。



▲改修、新装成った旧プール。25米7コース。昭和15年5月

►現プール、25米8コース。運動場の東南隅に  
昭和42年3月新設、旧プール跡はテニスコートとなつた。



◀レリーフ“闘魂”  
阿部幸作先輩揮毫。  
若山克己先輩彫刻。  
昭和37年、水泳部創設40年  
を記念して、旧プールサイドに作られたが、昭和47年  
9月、現プール東南隅に移転。

## 卷頭之言

阿部幸作

五十周年記念誌を発刊するに当つて

四十四期 楠本修

五十にして天命を知る、とは論語に在り。桃陰水泳倶楽部も五十歳になつた今日、吾等に対し天が何を為せと命じてゐるかを胸に手を當てて考へて見なければなるまい。年月の経過は、単純なる時間の積み重ねであつてはならぬ。

「危しとする者は、其の位を安んずる者なり。亡びんとする者は、其の存するを保つ者なり。乱れんとする者は、其の治まるを有つ者なり。是の故に、君子は安けれども危きを忘れず、存すれども亡ぶるを忘れず、治まればも乱るるを忘れず。是を以て身安くして国家保つべきなり。」と、易繫辞下伝、にある。之が永遠の進歩向上の道であり、天下太平の基を開く心底であると考えられる。

スポーツであれ、學問であれ、実務であれ、帰する処は一つである。即ち吾等は、五十年の歴史と伝統の自覚を、深く吾等の魂の中に培うことによつて、吾等自身を真個人間として作り上げてゆかねばならぬ。それあつてこそ桃陰水泳倶楽部は天下の集りとなり得る。歴史と伝統の自覺を失つた者は、單なる社会大衆の一員に過ぎぬ。

## 座談会

### 「五十年を語る」

出席者

二十五期	阿部 幸作	二十一期	大島 佐七
二十七期	益子 二郎	三十三期	中川 一三
三十七期	谷田 一雄	四十一期	新 保
四十二期	浜田 通夫	四十四期	楠本 修
四十四期	塩川 美幸	四十五期	若宮 克巳
四十七期	岡田 恭三	四十七期	大西 実
四十八期	丸井 久弥	四十八期	三田 豊造
高六期	住井 雅義	高十一期	村瀬 欽一
高十六期	植田 豊実	高十六期	西垣 行雄
高十七期	鈴木 俊彦		

司会

高五期 近松 誉文

司会者 「わたし達と阿部さんとの間には親子ほどの年令の違いがあり判らないことが沢山ありますので、そのころのことを二、三おうがいしたいと思います。最初に、そのころの校舎は？」

阿部 「わたしの二年生のときに上本町の現外語大学のある場所から現在地に移った。勿論プールなんて日本國中どこにもなかった。だから在学中は池で練習し、タンク（プール）ができるのは卒業後一年してからで水泳で競争する考え方なんでものは全く普及していなかつたが、全国中学大会のようなものが毎日新聞

社の主催で浜寺の海中で開かれるようになった。そのころ、岸和田中学の斎藤と言うのが、舟と舟との間の五十米の記録で三十一秒位出して日本記録だとか言つて威張つとつたが、土用波にのせられて向うへ着いたんだから、わたしは極めてあいまいな記録だと思うとる。」

司会者 「制服はすでにきまっていたのですね」

阿部 「きまつとつたよ。きまらんようになつたのは最近だよ。このごろはカフェーの女給と区別つかんのと同じで、学生と立場のアンチャンとも区別がつかん。服装を端正にしなければ世の中良くならんよ」

大島 「そのころは服装も態度も厳格でズボンのポケットも手を入れんように縫つていて、まるで士官学校のような雰囲気でした」

司会者 「水泳の練習の方法は？」

益子 「いま阿部さんの言われたことを補足しますが、大毎主催での浜寺での全国大会、三、〇〇〇米の責任リレーは浜に作ったスタンドから沖の舟まで泳ぐんです」

大島 「三、〇〇〇米責任リレーは大会のメインイベントで競技の最終にやるんです。私と森好雄君とで一、五〇〇米づつクロールやつたり抜き手をやつたり三十分以上かかるって泳ぎました。だから往復で一時間もかかるわけですから提灯に灯をつけて審判は発着を確認していました。練習は池とか海で、堺中と一緒に堺中のうらの汚い池で一年間やつたことがあります」

益子 「アントワーブのオリンピックに参加せられた斎藤兼吉先生が外国では何マイルもクロールで泳ぐんだと言われたけれど、千五百〇泳げる者はそういうなかつた。われわれの同期生では短距離で中野君が早かつた。なお岸和田の斎藤は五十米二十九秒で斎藤先生の記録は塩水で三十一秒タンクで三〇秒でした」

司会者 「そうすると中川先輩のところには水泳部はプールで練習して

中川

「わたしが入学したのが大正十五年で、ブールができたのは大正十三年大島先輩のころですから、一年生のときは金子主将のもとで本格的にやりました。ところが、わたしの一年生の冬三学期に天中校舎が全焼しそのため二年生のときは授業も工業奨励館や現夕陽丘高校の女子師範旧校舎等へ通うと言うわけで水泳の練習どころではなかつたわけですし、他の運動部もろくに練習ができずに惨たんたるものでした。わたしの三年生のときは丹羽主将で部員も一年から五年まで十名程度です。四年になって新校舎ができましたが、五年生に水泳部員がいなかつたからわたしは主将兼任のトレーナになつて水泳部復活に努力しました。まず部員を増やすことが先決だと言うわけで、同級生の内山、泉原、山本、吉岡君を入れ、一年二年の下級生の部員募集に全力を注ぎました。戦績としては学級対抗に精を出しました。これは一年二年の下級生でも全員出場できるからです。五年生のときに宝塚ブールが新設され、ブール開きに名門中学として天中水泳部が招待され、わたし、泉原、内山、鎌倉仁で二〇〇リレーに出ました。このときは二分一秒位で茨木に勝っています。わたし自身の記録は一〇〇米一分十秒前後で府下大会決勝に残る程度でしたが、泳ぎ初めの記録としては、天中生の見守るなかで、元旦、薄水をバリバリと割りながら、内山、張間君と泳ぎました。この記録だけは破られることのない記録だと思います。それから、わたしの一年生のときには水泳競技も、自由型、平泳、背泳と種目も判然とし練習も近代的になりました。」

司会者

「谷田さんのころには天中水泳部も大躍進をされたわけでですが、そのころはもう合宿練習はあったのですか」

谷田

「合宿はわたしが卒業してから二年ばかり後だと思います。ブール掃除なんて滅多にしなかつたので底の見えるブールで泳いだ記憶は殆んどありません。ブール掃除になると排水が大変

でポンプが焼けたり、管がつまつたりするとバケツリレーで水をくみ出しました」

中川

「吉岡と言うわたしらのころのマネージャーは授業に出ないでポンプを冷やしていた」

谷田

「ブール掃除のあとはウドンなんか食わしてもらつたが、中川さんの機嫌の良いときはライスカレーが出た。戦績は、その当時は茨木の全盛時代で全種目に優勝していましたが四年のとき二〇〇米リレー（わたし、水郡、飯田、鎌倉）で茨木に勝ち、わたしは阪和対抗戦に出場しました」

新

「桃陰水泳クラブができたのはわたしの時代です。ロサンゼルスで水泳日本の名を挙げたころで水泳に対する関心が非常に高まつた時代でした。わたし達は谷田さんのころを第一期黄金時代と呼び、部室に天中記録がはり出されていましたが、それも谷田さんのころの記録が殆んどでした。また、茨木を破るために茨木以上の練習が必要だと言う考え方で猛練習にあけくれました」

司会者

「それでは第二期黄金時代に入った浜田さんから、そのころのこと」

浜田

「入学したのが昭和十年で、西岡君、阿部君が同期生で二人とも大変早かったです。四年生のときのコーチが若宮さんで天中前のマサミ旅館で初めて合宿しましたが、大変厳格なんですよイローゼになるほどでした。五年生のときは新先輩のコーチの下で初めて府下大会で優勝しました。楠本君が八〇〇、西岡君が四〇〇、リレーでも優勝し、バックで伊藤君も活躍しました。水球もわたしのはいったところから始め、本格的にしたのはわたしの五年生のときで、全国大会出場の権利を得たのですが、茨木の杉本伝氏がこれでは見るには忍びないと早大OBの上野氏を紹介して下さって、来てもらつて、甲子園の全国大会へ出了ました。メンバーは阿部、西岡、田中、伊藤、楠本、塩川、わ

たしだったと思います」

司会者 「若山さんはそのころ在学していられたのですね」

若山 「ええ、一年のときは水泳をやりましたが、水泳OBの岩田さんとラグビーOBの西原さんとの話し合いでラグビーにかわりました。印象に残っているのはやはり水の問題で、近所の人から苦情を言われたり、また大変な好意をうけたりしたことですか？」

塩川

「合宿は五年生のときは天中東側の空家を借り、マネージャーの片桐君がマカナイの大将になつてやりました。練習は、始めにロング、次にピート、その後はミッテルかレースコース、最後はダッシュ」と言う形式でしたが、五年の後半に当時二〇〇、四〇〇の日本一の泳者だった早稲田の宮本茂がきて、俗にミヤ

ロンと言う四〇〇位の制限付ロングを何回もすると言う練習をやりました。今まで言うとインターバル練習のようなものでしたね。そのころのコーチは阿部忠雄さんでした。戦績は三年生

のときは一位、四年生のときは田中主将で二位、五年のときは一位。一〇〇で松浦が優勝、二〇〇塩川二位、四〇〇、八〇〇楠本、平泳で深尾が各々一位、リレーは二〇〇、八〇〇とも優勝です。真田山で大会が終つて、その日わたしは新、浜田先輩のもとで別の意味で男にしていただきました」

岡田

「十五年にわたしが入学したのですが、そのときは茨木に優勝盃をとり戻された年で大会のあとの会はしんみりした雰囲気でした。その翌年楠本主将のもとで一・二部とも優勝です。たしか、優勝した日に、アベノの富士屋で先輩、田中校長、北川部長以下集つて喜びを分かち合つたのですが、優勝盃にサイダーをなみなみとついで北川部長が飲みながら「この光栄を孫々に伝えん」と言われたのを憶えています。その後十八年、十九年と戦争が次第にきびしくなり工場へわたしは勤員で行きましたが、十九年夏、府下の中学校が数校集まつて水泳大会のよ

うなものを開きました。種目は二十五名リレーとか、レンガを

四、五枚くくつて運ぶリレーとか戦時色豊かなものでした」

司会者 「戦後の部に入るのですが、大西さんは戦争直後のコーチとして活動されたのですか」

大西 「入学したのが岡田と同期ですが、しばられただけで大会がなくなったわけですので、こんどはシボリカエシテやろうと思つて二十一年から行きました。そのころは続々と復員された先輩がプールにこられ、例えば森さん、谷田さんと言う大先輩から浜田さんもこられると言うわけで、非常に先輩に恵まれた時期でした。水球は田中先輩の助言で復活、塩川さんも早稲田から帰つてこられてコーチをされ、その結果二十二年に全国優勝しました」

丸井

「二十一年の府下大会は富田林で競泳で二位、二十二年は圧倒的な強さで優勝しました。わたしの在校中は防空壕掘りで練習できなかつた」

三田

「丸井君と同期生です。水泳部に入ったのは片桐さんからスカウトされたのですが、片桐さんがキャブテンだらうから優遇してもらえると思つたらキャブテンは楠本さんで片桐さんがマネジャーでした。最初は平泳でしたが、森口先輩に、「自由型やれ、自由型なら、よけ泳げるぞ」と言われて自由型に転向して、二部の一〇〇メートル二〇〇メートルで優勝しました。朝礼で校長に賞められたのはあとにもさきにもそれが一遍ですわ」

司会者 「戦争直後の天王寺は水泳のみならずラグビーも送球も強かったですね。あの食糧難の時代にメシもろくに食えなかつた都会の天王寺が強かつたと言うのは全く不思議ですが、その原因はどこにあつたのでしょうか」

大西 「先輩の熱意でしようね。あのころ若宮さんにトマトをもつてきて頂いたこともありますし、先輩の好意で練習後パンを食べたこともあります。プールへくるのが楽しかつたですよ。色

んな先輩がこられて……」

司会者 「その次の時代が私達の時代になるんですが」  
住井 「わたしが入ったときは天中最後の人が三年に残つておられた。わたしは新制中学二期で、新制中学にはO.B.と言うものがなかつたせいか、天高へきてブールサイドで古い先輩の話を聞くのが楽しみでした。私が天高に入学しましたのは、昭和二十六年で卒業しましたのは昭和二十九年ですが、入学する前年の二十五年には反田、手納さんの時代でその年は優勝しておりました。しかし二十六年には強い方が残つておられたにもかかわらず、試合の前日に全員下痢をしまして戦意を失い慄胆たる成績で帰つてきました。あとで岡田さん、大西さんにこっぴどくしかられたという記憶があります。この頃から一つ認識しているだけなければならない問題が出てきていたと思うのです。といふのは、旧制中学の間は五年間練習出来た。しかし新制中学生を迎えると、ほとんどが高校へ入つてから水泳を始めた者ばかりで、三年間で成果を上げるのは非常にむずかしいのです。ですから新制中学で水泳をやっている人が高校へ入つてきてやれる学校が強くなつたわけです。こういう点で一つの時代の差が出てきたように思います。そこで私は先輩方にお願いして、中学生を勧誘に行きましたがその時はうまく行かなかつた。私は中学校から水泳をやつていたのですが、高校に入つてから水泳を始めた人で国体に出場したのはおそらく私より一期上の繁沢さんだけだと思います。私は一〇〇で優勝、五〇で二位になりました。この優勝は少々眉つば物で、実はその頃、長谷といふ後にマルボルンに出場した有名な選手がおりましたが、幸い彼が盲腸炎で休みましたので私が優勝出来たわけですが、私が三年になりました時には万並さんが熱心に指導して下さつたにもかかわらず惨敗たる成績でした。これは完全に新制中学卒業の悪い面が出てしまったといえます。練習方法としては、塩川

さん、安藤さん始め早稲田のO.B.の方が練習を見に来られてその頃としては非常に高級な練習方法をとつていたと思います」

司会者 「ありがとうございました。ただいま住井君が申しました時代を経まして、戦後の黄金時代を迎えるわけですが、中学の優秀な選手をスカウトしてこなければいかんという事で、十河君とか、建部君と山上、松園と言う選手をスカウトしました。彼らが集つた時には府下で優勝、近畿大会でも上位で入賞するという活躍をつづけました。高校の九回、十回、それから十二回くらいまでが天高の水泳部が充実した時であつたと思います。私は今お話をありました十河さん、建部さん、山上さん、松園さんの次になりますと、私の一年下が竹林らの学年で、私が二年の時に一番良いメンバーが揃つたのですが、その時の一回目の府下大会での得点は八十点だったと思います。秋の大会には高校から始めた人も戦力になり一〇一点まで取つております。たしかその時の二位は三〇点くらいで、正に天高の黄金時代であつたと思います。練習方法は、私が二年の時からインターバルが始まってロングばかりの練習ではなくなりました」

西垣 「今まで何度かの黄金時代や衰退期の話がありましたが我々の時代はちょうど黄金時代が過ぎ去った時でして、非常に御心配をお掛けしました。先輩の方々がいつもブールに来られ、私達も懸命に練習しました。記録は悪くて申し訳なかったのですが、とにかくやれる限りやつたという事だけは、私の思い出になつています。それから、憶えていきますのは、一年生に入った時は全員フリーをやらされたのですが、二年の終りにはメンバーが足りないということで、私はバックに、吉岡はバタフライに、という風に他種目に転向させられたということです。結局どちらも中途半ばに終つてしまつて、もう少し部員の層が厚ければ自分の得意な種目に専念できたのではないかと思つています。もう一つ女子部員についてお話ししますと、我々の同期に

は五人いたのですが、大阪府下大会で、団体三位、個人で優勝した者もおりました」

司会者「鈴木君はかなりいい記録を残しているようですが、どちらのくらいだったのですか」

鈴木 平泳百米、長水路で一分十七秒六、二百米は、二分五十秒を割るか割らないかという所でした。練習方法はたいして変わっていませんが、先程、塩川先輩からミヤロンの発祥についてお話をあり、「ああ、そうか」と思つて聞いていたのですが、そういう四百米のロングを何本もやつた記憶があります。それから特に印象に残っているのは、私が三年生の時、二年先輩の高砂さんが、指導に来られて、早稲田式の練習だということで、初めてKPCとかPKCとかいいました、キック、ブル、コンビネーションをそれぞれ、単独に、二十五とか五十とかを泳ぐ練習方法がとり入れられたということです」

司会者「ありがとうございました。本日呼びかけなかつた女子部員も高校一期から始まつておらず、一年上の武田さん、中沢さんなど、元夕陽の水泳部だったのですが、かなり活躍され大阪府下でも上位に入賞しておられます。また十河君の時代には、松谷、福井、雜賀君等がおりまして、彼女らは各々全国高校十傑に入つております。そこで一通りお話をお聞きしましたが、特筆事項という事で

阿部さん何かお話し願えませんか」

阿部 「先程から皆さんの話を聞いておるのですが、何か一貫してあるものを感じます。その何かとは何かという事を少し考えてみたい。今までの話の中で黄金時代があつたとか、みじめな時代があつたとかおっしゃつたけれど、黄金というのは金だ、金は天下の廻り物だからきつとまわつてくる、だから、黄金時代がどうとかこうとかと言う事よりも、その黄金がどうしたら廻つて来るのかを考えねばならぬ。桃陰水泳クラブ会誌の三号に

桃陰水泳クラブ会誌の三号に私が書いている事で今もそう思つてゐる事がある。それは団体競技と個人競技についてだが、団体競技は和を貴ばれる、和を貴ぶ為に個人を鍛える。個人を鍛える事により和を研こうとする。たまたま個人の実力が無くても団体の和によつて何とか凌いでいるという事はある。個人競技では個人が弱くては何にもならぬ。だから個人を鍛えねばならぬ。しかし個人を鍛えるには限度がある。人間は自分だけでは鍛えられぬ場合がある。これは団体の中で鍛えねばならぬ。その中で私は兵隊に行つた時の事を述べておるが、私は戦争中ビルマの山中を一枚の地図もなく戦闘行軍をやつた。その時個人ではとてもいかん。団体の力があつてこそいけるのだが、個人がへばつたらこれはみんなダメである。へばつたやつは悉く死んでしまう。だから団体の中に個人が培われている時は、自分の実力以上のものを發揮出来る場合があり得る。従つて我々のクラブと言うのは団体の和を創る事によつて個人を鍛える、これが一つの目的であります。

それで説教めいた事を申しますが、佐藤一斎の言志録という本の中に「化して教うれば教え入り易く、教えて化すれば化及び難し」という事を言つてゐる。「化して」という事は一つの雰囲気を創る事です。言い換えれば伝統だが、そういう伝統の中に入り込んでそこに教えを加えていつたならば、教えは、すつと入る。だから、桃陰水泳クラブといつ一つの伝統の有る物の中に人々を放り込み、一つの雰囲気の中で人間を鍛えれば技術もすつと身に付く。ところが伝統無くして各人まちまちに指導して伝統を作る、いわゆる団体を強くしていこうと思つても「化」は及び難しである。私はそこに何かがあると思う。その何かは一つの「化」を創るという一つの氣風であると思う。

天中の水泳というものは皆さんもおわかりの様に、大正十年

頃に齊藤謙吉という先生が来られた時に遡る。齊藤先生は、日本が初めて選手を派遣したアントワープオリンピック大会に水泳の選手として出場された。種目は四〇〇メートル競泳で、他の選手は全員クロールで泳いだのに對して先生は、ちんば抜手で、優勝したスエーデンのアルネボルン選手に三五〇メートルまでついていつたが足にけいれんを起して負けてしまった。

先生はむこうで習ってきたクロールを日本でひろめられたわけだ。

当時の野村校長は齊藤謙吉を引っぱったと大へん威張りよつたのですが、その時は齊藤先生が水泳の名人やとは知らなかつた。その内、豊田治助が先生と渡りを付けて、先生の家へ遊びに行く事になった。家は堺の大浜で海に近い静かな所でした。

水泳の話をしていると、クロールを知っているか、ときかれたので、知りませんといふと、それでは教えてやろうといふので、三月であつたけれども裏の海で実際に泳いで見せてくれた。

我々も一緒に泳がされたが初めての事でうまく出来る筈がない。頭をつけて泳いだのは前が見えないと、それは、かんで見当付けて泳ぐのだと事、息はどうするのかときくと、それは見てろ、顔を横に上げてするのだと言う。しかし初めての我々には、どこで息をしているのか、どうして直ぐ進むのかわからなかつた。ここにいる益子君なんかもえらそうな事を言つたが曲つてばかりであった。

齊藤先生は、その年の夏、浜寺水練学校の校長に招かれ、そこで茨木の生徒なんかにもクロールを教えた。その頃茨木中学にはプールがあつた。それは杉本伝と言う人が生徒に掘らせたもので、板張りで杭で留めてあつた。

その頃は運動部は今のように分化されていなかつたので、水泳部はラグビーもやつた。要するに、ラグビー部の母体は水泳部が作つたわけで、その頃は水泳とラグビーの両方をやつてい

たわけだ。

水泳であれラグビーであれそこには一貫して何かがある。ただスポーツをする事によってええ恰好をしようとか、良い気持になるとかそういう考え方ではなく、スポーツをやる事によって精神的に何か得るところがあるのではないかという事を、その頃から強くあるいはおぼろげながら感じていた。これが今に至り五〇年培われて来て今になつてスポーツをやる事によって何を感じるのかわかつてきた。それは言い換えれば、天王寺桃陰水泳クラブの様な雰囲気を創り、氣風を創り、その中で人間を創り養つてそれが社会に少しでも役立つてくれれば良いと考えている」

大島 「ある故人の言葉に、「一年穀を植うるべし、一〇〇年樹を植うるべし、一〇〇年人を植うるべし」というのがあります。これは、一年の計画をするには穀物を植えなさい。一〇〇年は樹を植えなさい。一〇〇年の計画には先ず、人を植え育てなさいという意味であります。我々は阿部先生に一〇〇年人を植えられたもので、皆さんも天高水泳部一〇〇年を将来迎えるにあたり、阿部先生によつて人を植えられた一人になられる事と思ひます。

益子 「齊藤先生についてお話をありました。私も先生のお宅へ訪つた時、おもしろい話を聞きました。先生が春に海で泳いでいると、巡回が来て、今頃泳いでもらつては困ると言つたので、「私は日本の選手として国際試合に出場しているもので今後も練習が必要ですから」と答えると、「そうですか、それは困りましたなあ、それでは私が巡回にくる時間をさけて練習して下さい」と言つたという事です。

先程阿部先輩の話の中にも出ましたが、あの頭はタンクにコースの区切りがないので皆よく曲りました。齊藤先生さえ茨木のタンクで泳いだ時、他の者より断然速いのに曲つてしまつて

横のカベにぶつかり一位になった事がありました。

最後に伝統という事について一言。伝統とは何か。それは科学的には説明出来ないだろうが観念的には現実に存在するし、実質的にも体験的に知覚しうるものであると思う。むやみにそれを科学的に解明しようと努力せずにその観念的な伝統を守つて、大島君の言うように天高水泳部一〇〇年の為にいやさかをお願いしたいと思います。」

「私は五年生の時キャブテンをしており、層としては充実していたのですが試合になるとあがると言うか期待はずれの成績でして、府下大会のあくる日、それまで一日も学校を休んだ事が無かつたが、その日だけは恰好が悪くて休んだ記憶があります。

あの頃は六軒長屋と言いまして、各運動部のクラブハウスが六軒並んでいて、そこで色々と阿部さんが言われるような人間の交流を通じて、伝統が生まれたものだらうと思います。

水泳部は近所の女学生にも人気がありましてよく練習をのぞきに来る女の子もおりました。その頃ふんどしの色を一年は赤、二年は橙、三年は緑、四年は青、五年は紫というようには決まつていたのですが、その色わけは、女学校の生徒が各学年毎に髪に結んでいた紐の色をまねたものであります。

私はもう五〇を過ぎておりますが、一生の内で一番一つの事に打ち込んだのは水泳の練習ではなかつたかと思います。卒業してからも楠本さんと一緒に新キッパスコーチの下で練習しました。しかし楠本さんは勝てなかつた。二〇〇〇のレースコースであれば一五〇まではついて行けるのだが、それから先で離されてしまうという調子でした。

先程ラグビーの話もでましたが、私もラグビーをしてまして五年の時には応援団長もやりました。

それから、私が四年生の時ですが、天中のグラウンドで行な

われた定期戦で、初めて北野に敗けて、田中校長が泣きながら

国旗を焼いたということを記憶しています。」

司会者 「練習の時はふんどしだったと思いますが、試合の時はどうだつたのですか？」

谷田 「ランニングシャツとパンツを継いだようなものでシューイングものがありました、試合の時にはそれを着なければならなかつた。ある時期からは、それを部費で買ってもらいました。非常に嬉しかつた。それはシルクでできいて、綿の靴下のようによくでんせんがいきました。

ロスアンゼルスのオリンピック大会の時に日本の選手が全員綿のふんどしをして、その上にショーツを着たという話もあります」

司会者 「それでは次は楠本さんにお願いします」

楠本 「私は水球のこと、桃陰水泳クラブのことを少し話させて頂きます。水球の府下大会は昭和八年から始りました。鎌倉、水郡時代です。この第一回から我が水泳部は出場しています。昭和十四年、先程話がありました浜田主将の時に、早稲田の名水球選手であった上野コーチを迎えて、日本のトップグループに躍り出ることになるわけであります。当時水球は、大阪のトップ即日本のトップでありました。ここまで天中チームを育て上げたのは、当時の名監督、新先輩です。我々はアメリカの水泳陣を長年ひきいて名監督とほまれの高いキッパス監督の名をかりて、我等の敬愛する監督をキッパスと呼んでいました。ここで山頂を眼のあたり見た伝統が、昭和二十二年、松本、安藤兄弟の時に全国優勝するということに繰がるわけであります。当時の名鬼監督は、大西先輩であります。この水球は、昭和二十九年まで続けられました。当時鴨沂は、ひよこであり、済々黙が勃興し、強さを誇っていましたが、天高チームは殆ど毎年全国大会に出場し、多く上位を占め、天下の名門であ

りました。然しこの水球は、先程住井君から話がありましたよう、競泳の沈滯を破るカーフルとして「泳ぎなくしては水球もない、泳ぎがあれば水球は何時でも出来る。競泳一本で泳ぎを強化しろ」という塩川先輩等の主張にもとづく桃陰水泳クラブの判断で、昭和二十九年をもって中止になりました。以後の

競泳一本の強化が、二〇三年を経て全国制覇を目指して十河、竹林時代を生むわけであります。全国制覇は残念ながらせんでしたが。

桃陰水泳クラブは、現役を準会員とする先輩団の組織でありますから、天中水泳部はじまつて以来、もとより存在したといふことになります。阿部、大島、益子、或は中川先輩の話にありますように、よき先輩の絶えざる献身的指導、叱咤激励の中に天中水泳部は大きくなつて來ました。唯全先輩の組織として桃陰水泳クラブと銘打つて組織的に活動し出したのが、昭和八年ということです。初代会長、阿部先輩、これ又鎌倉、水郡時代であります。この年の前年はロスアンゼルスのオリンピックで、水泳日本の実力を世界に顯示した時であり、ムードも分らうというところです。この桃陰水泳クラブでなくして、今日の水泳部も、我々の水泳部時代も、現在の我々もないことは明かです。伝統は無条件に尊しとしなければなりません。眞の発展、地に足のついた進歩は、伝統の創造的な継承の中にこそあらうと思います。

天中、天高水泳部は五十年経つたわけであります、母校ならびに我々の存する限り桃陰水泳クラブを盛大に存続させねばなりません。特に若い後輩諸君に、阿部、大島、益子大先輩等によつてはじめられたこの桃陰水泳クラブを、一番大事なところを護持して、全力をつくして発展させて頂きたいと願います。

## 座談会

### 「終戦後の水泳部」

語り手	高二回	万並正
	高四回	松隆将男
聞きて	四十五回	若山克己
	高六回	住井雅義

「万並さんは入学されたのは戦時中でしたね」

万並

「昭和十九年です。そのころは勤労動員で上級生は殆んど見かけなかつたですね。二、三年生はときたま見かけたようと思いますが、最上級生の岡田さんは一度か二度しか逢つていません。勿論、練習らしい練習はなく、ラグビーは闘球班、陸上競技部は戦場競技班と名付けられていました。ですから在学中の思い出となると、むしろ終戦直後にあります。とくに終戦の翌年なんかは三人（南北朝鮮人）が闘市を中心に跳梁跋扈した時代で、彼らがピストルを持ってきて、ブールで泳がせろと脅迫したことがあります。と言つても今のようなきれいなブールではなく一度も入れかえたことのない水ですから、臭くて汚なくて藻が浮いてるブールでした。それが外部の圧力で満員の盛況を示し、たしかその翌年は津川マネージャーが入場料をとつて公式に開放、そのカネを部費に充当したことがあります」

万並

「ええ、昭和二十二年、第一回国民体育大会兼全国大会です。」

済々饗を破つて優勝しました。競泳の方は二十二年からずっと府下で優勝しました。そのころの天中天高は水泳に限らずどの運動部も大変強く、野球、ハンドボール、バスケット、ラグビー、体操等も府下で優勝、全国大会でも活躍していました。ですから国体の時期になると私のクラスでは半数以上がいなくなつるありさまでした。それに大阪駅での選手歓送風景も、かつての海兵予科練を送り出した名残りがあつて各校とも盛大にやつていました

「何故、天王寺がそれほど強かつたのですか」

万並 「やはり伝統でしょう。他校以上に強力な先輩が存在し、それが二十一年から二十二年に復員され、その人達が沢山ブルサイドに集つてこられた。伊藤さん、高木さん、塩川さん等々、いま考へると暇をもて余しておられたのかも知れませんが……。ラグビーでも他のクラブでも現役の選手より先輩の方が多くくらいの盛況でした」

「勉強はあまりしなかったのですか？」當時は豪傑が多かつたよううに聞いています

万並 「レベルはやはり高かったです。五十一期の大学進学率は非常に良かったのですから。しかし、反面私のような勉強しないで運動ばかりしているのも沢山いました」

「新任の先生をブルーに放りこんだとか」

松隆 「私は横で見ていましたが、あんなことができたのも万並さ

んの時代だけでしょう。私が入学したのは戦後第一期で二十二年です。一年上は戦争末期でしたから入試がなく内申書による入学です。二十二年は学制改革か新入生なし。私達は大阪府立天王寺高等学校併設中学校生徒となつたわけです。そして翌二十三年四月に夕陽丘女学校と合流、始めて男女共学になつたのです」

万並 「当時の学校の氣風としては戦争中の質実剛健なものが大勢

をしめていたのですが、一部に非常に急進的なものがいまして、それが全国の中学校で始めて「青年共産同盟」を組織して大問題になり、進駐軍は天王寺を廢校にしようとしたことがあります。それで運動部の者や先輩が学校を残すために府庁で陳情したり区民大会を阿倍野女学校で開いたりしました。その結果天中校舎を新制中学に明け渡し、夕陽丘へ行つたのです」

「夕陽へ行かれたときの第一印象はどうでした」

松隆 「桜とチューリップが満開でしてまるでパラダイスへきたなと言う氣持でした。谷田先輩がそのころ夕陽のブルーへこられて、お前達は大変幸福な奴だ。自分達のころにはそつとこのブルーへきて水筒に一杯の水を盗み出し、それを持ってかえつてみんなにチョコに一杯づつ配つたものだと言われたことがあります。万並さんの学年は男女共学ではなかつたのです」

若山 「夕陽が合流を求めたのに天王寺が反対したようですね」

松隆 「そのころはスポーツ以外に遊びがなかつたし、先生の数も不足していく六時間の授業のうち三時間が自習、つまり「もうけ」と言うわけで運動場かブルーで走つたり泳いだりしました」

「特筆すべきことと言えば」

万並 「なんといっても全国優勝したころのことですね。とにかくあのころは大変な食糧難で、腹が減つて仕方のないありますでしたが、先輩が毎日パンを差し入れて下さるんですね。それがうまくてたまらなかつたのです」

松隆 「私達は一年から高二になるまで下級生がなく、ずっと「オイ一年！」なんて呼ばれていましたが、しつけは当然軍国主義のころと變らず、それが高二になつて入ってきた下級生が余りにもダラシなかつたので腹が立ち、二人ばかりなぐつたことがあります。すると、それが警察沙汰になつて私は停学処分、そのうえ二人にあやまれと言われ男泣きに泣いたことがあります。北川先生から「お前は悪いんじゃない、当り前のことをしてただけ

や、しかし時代が変わったんやから」と慰められたけれども、ほんとうに残念だった」

\*\*\*\*\*

## 五十一年日を迎えた水泳部

水泳部々長 福田 隆

伝統ある桃陰水泳部が、創立五〇年を迎えた。昨年夏盛大に記念式典を催されました。誠に意義深いものを感じます。

日本水泳連盟の創立も大正十三年、桃陰水泳部の創部と同時期になり、改めて歴史の古さに驚いて居ります。  
現プールが新装なった昭和四十二年、茨木高校より転任して参りまして以来、水泳部の指導をまかされて居りますが、いまだ御期待にそえず、申し訳なく思つて居ります。

今年は五十一年目、輝しい伝統の上に新風を吹き込むべく気分新たに再出発致しました。

年々水泳シーズン（試合時期）が早まり、従来夏のスポーツだった水泳が、オールシーズン制に移りつつある時、本校でも初めての試みとして、三月下旬と四月上旬にかけ、和歌山県広川温泉プールで春合宿を実施致しました。短期間ではありましたが、かなりの成果があり、大いに頑張つたのですが、残念ながら今年もインターハイに出場出来ませんでした。（インターハイ出場資格は近畿

高校で第二位までと、標準記録へ前年度高校ランキング二十傑へを突破したもの）しかし来年からの下地が出来たと思って居ります。

過日、大阪プールで実施された日本年令別水泳選手権の際、東京オリンピックで大活躍した名選手、アメリカのドン・ショーランダーが来阪され、色々体験談を聞かせてくれました。練習は一週間に十回、一回の練習時間が三時間程度、練習内容も十一回ともすべて違い、その内一回は自分でスケジュールを組むと申して居りました。（単調であきて来る練習方法に変化を持たすため等）又、最近弱くなつた日本のクロールの原因は、選手の体格と練習量の差で、クロールの場合、細くて背の高い者（身長一七五cm以上）をさがし、練習させる事だと申して居りました。

その他ホームについて等色々、我々指導者には大いに参考になりました。

さて本校の現状ですが、部員十八名（男十一名、女七名）と例年になく多く、今後の活躍が期待出来ます。（中学時代の経験者約半数）

今年度の成績の一端を御報告致します。

岡村君 三年（背泳ぎ）の場合 一年入学時 カナズチ、九月一分二十五秒一、二年一分十六秒九、三年一分十二秒二（大阪高校第六位で近畿大会に出場） 記録から見れば大した事が有りませんが、三年間一日も練習休まず、頑張った努力の結晶と思つて居ります。

その他（男子）

- 四〇〇メドレーリレー 四分五十二秒一
- 二〇〇背泳ぎ 二分三十八秒二
- 一〇〇平泳ぎ 一分十八秒一
- " 一分十八秒三
- 二〇〇平泳ぎ 二分五十五秒六
- " 二分五十一秒九

• 100バタフライ

一分十秒二

(女子)

一分二十五秒九

• 100背泳ぎ

三分八秒四

• 200個人メドレー

三分九秒二

以上の種目で大阪高校大会で決勝に進出して居りますが、今一步のところで入賞する事が出来ませんでした。大阪の場合、私立高校、スイミングクラブのかべが相変らず厚く府立高校でインターハイ出場者が二名（男女各一名）と低迷を続けて居ります。

水泳競技人口は年々増え、大会参加校が約100校、100自由型等は予選三十組を越え、三日間で消化しているのが大阪の現状です。

本校の場合、往年の天中、天高が、インターハイ、国体等で活躍され、輝しい戦果を得られた頃に比べ、極めて不振で低調ですが、部員一同、何んとか往年の姿を取り戻すべく、努力致して居りますので、今後共何卒宜しく、御指導、御援助の程、御願い申し上げます。

今後、益々桃陰水泳部が発展する事を願い、皆様方の御健康、心から願って居ります。

最後になりましたが、平素何かと現役部員に御指導、御援助頂き、部員をあざかる者として先輩諸氏に厚く御礼申し上げます。又学校の本練会に際しましても、指導者を派遣して頂き、重ねて御礼申し上げます。今後共宜しくお願い致します。

学校紛争と言つものが始つてから既に相当の年月を経たるにも拘らずなかなかに終焉しそうにもない。その原因は何處にあるのであろうか。それは今日程、教える者にも教えられる者にも、自分の心を深く省り見ると言つことを怠つてゐることとの之程劇しい時代は無いからである。換言するならば、今日は正に知識と人格の離反時代である。米国のターナーと言う学者は言つてゐる。「学校問題の解決は既に示されている。教師は教えるもの、学生は学ぶ者、管理者は管理するもの」と。

嘉永四年正月の頃、佐久間象山は江戸木挽町に居を構えて塾を開いた。象山正に四十一歳、彼の心胸広闊、阜牢の見識自ら成り、名聲噴々として一世を風靡した。吉田松陰は之を慕つて、是非共象山の弟子にならんものと象山の許へ出向くのである。その頃の松陰は廿歳を出たばかり、氣力横溢、血氣最も壯んな頃であった。元来松陰と言う人は、甚だ風采をかまわぬ人でもあったので、蓬頭亂髪小倉の袴を着て卒直簡明に入門を乞うた。之に反し象山は、總髪長髯、綸子の被布を羽織り、莊重にして威儀を正し、虎の皮の敷物に座して松陰を引見した。象山曰く「貴公は教えを乞いに來たのか、學問をする心算で來たのか、果又言葉を習ふ心算で來たのか」と問うた。松陰畏まって、「先生の御名声を慕い參上、是非共御教えを頂きたく」と乞う。象山言葉を革めて然らばと松陰の粗野無礼を責め、「學問をするつもりならば、態度服装を改め、弟子の礼を執つて來れ」と一喝して追い返した。松陰深く反省し、愈々象山に惚れ込んで、直ちに髪を梳り、衣服を改め、上下を着し、懲懲礼を尽して入門を乞い、許されてその門下となつた。後に松陰は、兄に宛て

## 学校教育と吾等先輩

二十五期 阿部幸作

た手紙の中に「佐久間象山は、当今の豪傑、天下第一人に御座候」と言っている。さればこそ象山も、神魂以て松陰を教えた。後に松陰は海外に渡航して世界の形勢実情を極め、外国の知識を吸収して邦家の急務に役立てたいことを象山に打ち明けたのである。象山之を聴いて痛く感じ入り、松陰に対してあの有名な詩「之の子靈骨あり、久しく厭ふ笠躰の群、衣ち振ふ萬里の道云々」を書いて、金四糸を之に添えて与えるのである。松陰下田に於て踏海の挙遂に失敗して捕られた時に、松陰の持っていた行李の中から象山の右の詩が出て来たので、象山も連座して伝馬町の獄舎に投ぜられるのである。

私はこの話を思う毎に、現今世想を思い、人の心の行く末を思つては、三嘆之を久しうせざるを得ない。即ち現代の学校に於ては、象山の如き師もなければ、松陰の如き弟子も無い。従つて現代に於ては、知識供給場はあっても学校教育などは無い。結局之は裏にも言つた通り、人格と知識の離反時代であること之程甚しい時代はないからである。即ち人間の心の中味の伴はない知識などは、文明の進歩に益するものではない。

然らば学校とは何ぞや。言う迄もなく学校とは正しき学問を教える処である。然らば学問とは何ぞや、之を一言で申すならば、多少難しい言葉になるが、学問とは一心の成滿である。吾等の心裡に在る至上法を把握するに在る。把握して之を生活に実現するに在る。斯の如き觀点から申せば、現代の学校、殊に大学は暴力、不道徳不規律、集団蓄性的の檻の如きものだと申すも過言ではない。

私は遺憾乍ら今日の学校教育に対し満腔の信を抱くことが出来ない。それは学校教育のみならず今の世の中のあらゆる面に於てもそうではないたと言ふ議論も出るであろうが、それは全くその通りであつて、繁栄とか、レジャーとか言うことの前に、その根本に於て物事の是非善惡とか、人間の義理人情、文明の正しい進歩と言うようなことを確り考へないので、軽俳浮薄極まる生活、行動をしていたら、一体之から先、国はどうなつてゆくだろうか。蓋し今の世の

中の風潮程、人としての自覺を促すことを無視している傾向にある世の中はないからである。然らば何が人間の自覺を促すことを無視させる風潮を作つてゐるのか。その一大基因を為すものは、謀略を以て行われているのかとさへ思われる。隱然たる共産主義思想の瀰漫である。マルキシズムは勝れたる理論ではあるが、總て人間の行為を環境によつて説明する。それは行為者自身に責任はないと言うことであつて、道徳的弱者にとつては便利な武器である。だから道徳的に弱い者が、マルキシズムの砦に隠れると言う傾向にあるとは小泉信三も言う處である。

斯る傾向の中に在つて、狂瀾を既倒に廻らすが為には吾々は何を為すべきか。即ち之を学校について申すならば、学校は一体誰のものなのだ。私は学校は吾等先輩と在校生のものであると言いたい。良かれ悪しかれ、自分の出た学校のことを考へない者は、自分の家を忘れ、親兄弟を忘れ、延いては國を忘れててしまう者である。この意味に於て私は今此處に松陰五十年を期して改めて母校のことを考え、吾等と後輩の行く末と共に國の行く末を考えて見たいと思うのである。即ち然らば一体之をどうしたらよいのであろうか。私は次の話をして憶い出して私の結論に代えたいと思う。

一八二〇年頃の英國と言えば、それはチャーチルス二世の時代であつて、それは丁度今日の日本のように繁栄の為に人心が最も腐敗堕落した時代であった。フェイスフルハズバンドと言う言葉が流行したが、それは今日の日本で恍惚と言う言葉が逆の意味に使われているように、女遊びも出来ない馬鹿野郎と言う意味に使われていた。当時の大学生々活は、この情生活の最も端的な現われであつて学校は遊戯場であり、賭博場であり、端正なる服装などしたものは一人もなく、風紀紊乱目に余つた。その時にオックスフォード大学生の中にジョン・ウエスレーとホーリー・フレードと言う一人の学生がいた。この二人は共に敬虔なる基督教信者であつたが、この暴状見るに忍びず、敢然として腐敗渦巻く全學生の中に起ち上つたので

ある。彼等二人は大学の構内に於て、オックスフォードの街角に於て、学生に又大衆に、人々の墮落を糾弾し、順々呼として神の道を説き、人間は之無くしては人間ではないと言う人間の徳性を自覚すべきことを強調し、熱涙溢る弁舌を振つて昼夜を分たず碎身した。特に彼等は先づその第一番に為すべきこととして人間は規律、礼(メソド)を重んすべきことを説いたのである。初めの間は、多くの学生は彼等を氣狂い扱いにし、或は嘲笑し、或る時には妨害の拳にさえ出た。されど一人は少しも届せず、更に勇氣百倍の氣力を以て、説いて説いて、絶叫した。ジョン・ウエスレーとホイット・フィールドの悲願空しからず、オックスフォードの一角より発して、遂に全英に一大精神運動が起り、続いて英國は名宰相ピットの時代に仄ると共に、健全なる紳士の國として立ち直ったのである。今日メソヂスト派と称する基督教の一派は、この二人に源を発するものである。

私は今此處に改めて今日のわが国を思うにつけても、今日の日本にも、もう少し真理を愛好する純情なる熱情家が出て来て、この日本人の現代氣質を変化しなければ民族は助からないと思う。  
鍛えられたる良きスポーツ精神は熱情の発露である。桃陰水泳五十年に当り、母校に発する精神力の源泉は、と共に競技の中に養つて來た吾等先輩の内なるものに在ると思うのである。即ち吾等は、吾等の徳性を磨くことによつて良きスポーツとなろうと思う。良きスポーツマンは良き隣人でなければならぬ。たとえオックスフォードのジョン・ウエスレーやホイット・フィールドのような役目は果せなくとも、先づ吾々の周囲から、吾々の光を以て之を照してゆくよう努めたいと思う。廻りくどくともそれが最上の近道だと私は思うからである。それが吾等先輩の務めである。

昭和四十八年三月十二日記

## 天中時代の思い出

(高橋先輩と齊藤先生のことなども)

天中二十五回 豊田治助

ユーカリ樹が印象的だった上本町八丁目の旧校舎に入学したのが、大正七年の四月であった。卒業年度で申すと、二十五期生ということになっている。

### 遠泳五里の回顧

この夏、一年生は二年生と共に、堺の大浜で二週間の水泳訓練をうけることとなつた。私は小学校(島之内の道仁校)時代に、浜寺の海岸で練習していたので、蛙泳ぎは別段に難しいものではなくて、この夏の練習は寧ろ楽しいものであった。

訓練は専ら遠泳を目的として耐久力の涵養に主眼が置かれていたので、観海流で一町から試験がはじめられて、石津川尻までの二十五町の各距離は、そんなに苦労もなく、パスすることができた。次は大浜一浜寺間の五十町の試験をうけたのだが、多少辛いものだな、という感じで合格した。太陽の強い光を顔にうけながら泳いだので、翌日から顔面が荒れてしまったことの方が辛かった。

最終の長距離、沖渡り三里半と五里的試験が七月三十日に行われた。午前七時から泳ぎはじめて、浜寺の沖合いで昼の弁当を船上で喰べて、すぐにまた海にとび込んだ。朝から午後にかけて、可成り強い南風が吹いていたので、三里半の大津の岬に着いたときは、さすがにへばつてしまつていて、砂糖湯を飲んだときは、蘇生の思いがして、ぼつぼつ帰り仕度をはじめた。ところが、そこへ赤帽(助教)の上級生であった高橋信三さん(現、毎日放送KK社長)と有

田二郎さん（元衆議院議員）がやつて来られて、あと浜寺まで一里半泳げば、沖渡り五里的免状がもらえるのだから、頑張ってやつてみろ！と親切な激励をうけた。しかし延々七時間近く泳いで疲れていたので、どうせ無理をしても途中で落伍することになるから今年はもうここでやめたい、と言った。しかし五里的経験者であるこの二人の先輩は、来年の夏にはどうせこの同じコースで苦労するのだから頑張れ、途中で禪を持たせてやるから心配せずに続けろ！と半ば命令的な強引さで説得された。

さすがに、あとの一里半は苦しいものであつたが、この二人の先輩に助けられて、やつと浜寺の海岸まで戻ることができた。一年生で、この五里的遠泳にバスしたものは、虎間七太郎君（故人）と私は二人であつた。翌年の夏からは、二年生だったが赤帽の助教となつた。

この高橋信三先輩は、社会人としては毎日新聞社の経済部で活躍され、新日本放送が創立されるときに、その設立に参画されて現在は社長として、民間放送界で重きをなしておられる方である。私も戦前は同盟通信社、戦後は共同通信社に勤めていたので、仕事の関係からも随分お世話になつた。また昭和三十二年以降は、東京の六本木に在る国際文化会館に移つたのだが、この財団は会員制度によつて運営されているので、高橋先輩からは会員として多大のご支援をうけている。

この遠泳から数えてみると、実に半世紀の長きにわたつてご厄介になつてゐる間柄だということになる。私は良き先輩をもつてゐることを心から感謝している次第である。

### 齊藤兼吉先生の功績

私が四学年になつた大正十年の新学期から体操担任の教師として齊藤兼吉先生と申される、日本人離れのした筋骨の逞しい方が着任された。ご経歴は新潟県の佐渡島のお生れ（一八九五）で、学歴は

佐渡中学から東京高師の体育科を天正八年三月にご卒業になつた青年教師である。

大正六年に、東京芝浦で開催された第三回極東大会では、槍投に出場して一四三呎六吋の記録で優勝されたが、之は投擲競技の全種目を通じて日本選手としては唯一のもので、万丈の氣を吐かれたのである。

水上競技でも、五〇碼に二六秒四で一着。一〇〇碼でも六五秒〇で同じく一着。一一〇碼リレーでは二番を泳いで、一分五一秒六で優勝されている。

さらに大正九年の白耳義のアントワープにおける第七回オリンピックには学生選手とし水陸の競技に参加されている。陸上競技では五種競技に、水上では一〇〇米と四〇〇米の自由形に出場された。先生はこのオリンピックで、「クロール」泳法を修得して帰国されたため、それまで水府流で泳いでいた日本の水泳界は、この欧美流の泳法によつて大きな変革期を迎えることとなつた。従つて齊藤先生は、日本の水泳界にとつては、歴史的な人物であつたと申しても過言ではない。

当時の母校には、課目の如何を問わず、随分教師として立派な方が多数在職されていて生徒を薰陶されたが、この齊藤先生もそのうちのお一人であった。私は大浜の海岸で、先生から、この新しいクロール泳法のご指導をうけたことをなつかしく回想して、先生のご冥福を心からお祈りしたい。

齊藤先生は、奉天の満洲教育専門学校に、また戦後は新潟大学と、金沢大学の教育学部、ならびに中京大学体育学部の教授として歴任されたが昭和三十五年十月二十九日に名古屋において六十五才をもつてその生涯を終えられた。

この齊藤先生に関する記録とご経歴等は、私の親しい友人の北沢清兄（日本学生陸上競技連合の創立者の一人）から資料の提供をうけたので、ここに心から謝意を表明する次第である。

## 草わけ時代の思出

天中二十七回 益子二郎

水泳部五〇年、長いようでも過ぎてみれば束の間の感じです。私は丁度その前後に在校していましたので、私なりの記憶をたどってみますが、もし誤りがあれば御容赦願い度いと申し上げます。

本校の競泳選手として私は、一度も対外試合に出場したことはありません。益子姓で記録があるのは二十八回生の私の弟です。競泳の経験がないとは申しませんが、実質的には水泳教師でした。しかも当時最年少の教師でした。

大正六年八月末に浜寺水練場（後の浜寺水練学校）を卒業し、二年間研究生として過しました。大正九年に班長という資格で泳法の指導に当りました。私がそれが学校の知るところとなり、同時に浜寺水練場の班長となつた二十五回生の小野巖先輩と共に夏の水泳訓練に、助手として指導せよとの命を受け光榮を身一ぱいに感じながら堺大浜と港との中間の訓練場へ行きました。

当時、南海沿線は文字通りの白砂青松の地でした。高師の浜（高石村）以南は漁村で、わずかに堺大浜、浜寺が海水浴場として開発され、港、諏訪の森は主として各学校の訓練場に使用されていました。そしてすきとおる海中には人間とふれあいながら小魚が泳いでいました。

話がそれましたが、当時の水泳訓練は、一、二、三年生は義務で四、五年生は自由でした。ことあるうに一年坊主が、四、五年生の自由組を受持たされました。校内では敬愛する、反面こわい上級生のことですから恐る恐る相対しますと、約一〇数名から二〇名が毎日の受持人員で、いずれもある程度以上泳げる、しかも泳ぐことのすきな人ばかり、従つて厳重監視の必要もなく、各流派の泳法を

泳いでみせ、又一人一人が泳ぐのを手直しすればよいので大変樂しく過ごすことができました。

そして訓練最後の日に大浜のさる料亭に於て先生方と親子丼をいただいたことが何か一時昇格したような気持になり、嬉しかったのが印象に残っています。

その翌年、水府流の山崎先生（地・歴）と日本短距離界の第一人者でオリンピック選手として欧米へも度々遠征され、陸上競技でも一流選手であった斎藤先生（体育）が本校教諭として赴任され、指導方法の基礎が変りました。それまでは陸上や浅い処で平泳法の型を整え、然る後にそれに則つて泳ぐことに努力させるのであったものが、犬かきでも何でもよいからまず浮き、且前進することを可能ならしめ、その後に於てその目的とする型の泳法にはめいくことになりました。私のすることはあまり変りませんでしたが、國民皆泳方式一本槍で遠泳を主目的としていたものが、この時代を契機として競泳にも力をそそぐようになり、斎藤先生が大阪高等學校（旧制）に御栄転後もその努力を続けました。

その次の年、即ち大正十一年六、七、八月をチフスに罹つた為に隔離された私は、当然の事ながら水泳シーズンを零にしました。

然し翌年から又がんばればよかつたのですが、剣道、相撲、庭球の部員でもあつた関係もあり再起せず、水泳界から遠ざかってしまいました。本校選手として競泳大会に出場の機会をも失う結果となりました。ついでながら小野先輩もその頃から何となく遠ざかりました。

然し阿部、豊田先輩その他二十五回生の先輩方や東田君（二十六回生）、大島君（二十七回生）等の努力で水泳部（競泳部のことではあります）が誕生し、やがて活躍期にはいりました。特筆したいのは、中途転入で、卒業後あまり音信がない為忘れられ勝の二十七回生の中野君です。中野君は当時中等学校のみならず、高専、一般などの水準へ行つても短距離界では最高の泳者に属したものでした。

それに踵を接して、かつて私が浜寺水練場で初級を担当していた頃

中級生であった筈、森の両君が続々、御存じの通り一流チームとなりました。

以上、私の記憶による草わけ時代ですが、その頃自校にプール（当時はタンクと呼んでいましたし、現在のような完備したものではありませんでした）を持っていたのは茨木中学だけでした。所属は記憶しませんが、鳴尾にも一つありました。主として練習も大会も海上にスタンドを立てて行っていました。だがたまたま極東オリエンピックが大阪で開催されることになり、大阪市立運動場が出来まして、（プールは早くなくなりましたが、運動場としては先年まで存続しました）殆んどの競泳に関する練習、大会はそこで行われました。その後間もなく今上陛下（当時の皇太子殿下）の御成婚を祝し、その記念事業として本校にプールをつくることとなりまして、その基礎設計は一昨々年逝かれた辰巳先生が、そして初期の掘削は生徒の勤労奉仕に依ったのですが、その生徒の総指揮者に、水泳界から離れていたにも拘らず、最古参泳者、最上級生の故を以って選ばれ、大いに奮闘して汗を流しました。そしてプール開き式典時に進水者第一号の栄に浴しました。私事中心になってしましましたが自校にプールを持った事、即ち遠路築港の近くまで汗をかきながら行くのと、放課後すぐ飛込めるとの差は明白で部員も急速に多くなり、水泳部（競泳部）は本格的なものになりました。

最後に、はからずもそのプールの廃止について、泳ぎ納めの会当日の最終泳者の希望をかなえられ、一生忘ることのできない思い出の一つになりました。更に半世紀前の老人が何時訪れても新旧部員一体となつて母校水泳部をもり立てて居り、おとずれを親しく迎えて下さいます。ここに感謝をもつて水泳部よ、天高水泳人よ、母校と共に弥栄あれと申します。（紙数を節約したい為、経過が飛躍的なものになつたことを御諒承願います。）

## 私と水泳

東京大学名誉教授・埼玉医科大学教授

天中三十一期 木下 治雄

小生の生涯は水泳とともに展開してきたといつたら、大げさに聞えるかも知れないが、実はこのことは人にはあまり言つたことがないけれど本當である。

小学生時代、私は体操が一番下手で、したがつて一番きらいな科目であった。運動会が近づくと、学校が火事で焼けてしまった良いなどと考えたものである。しかし当時運動博士などといわれていた父が阪大をやめて、新聞社の運動部長になった頃には、いつも徒競走でずっと遅れて走る自分の姿に、子供心にも何か雪辱の気持といふか、父の手前、奮発しなくてはという意氣がわいてきた様である。そこで球技をも含めて陸上でのスポーツには全く適性がないものとあきらめて、当時毎夏浜寺で開催されていた大阪毎日新聞社の水練学校に通うことになる。ここで、私の記憶が誤つて居れば、失礼を深く御詫びしなければならないのだが、十年程天中水泳部の先輩である高橋信三さんに随分と可愛がられ面倒をみて頂いたことを覚えている。そのせいもあってか、私の水泳はやつと十人みなみの域に達し、天中三年の頃になつてやつと入部が許された。時あたかも天中最初のプールが全校生徒の汗の結晶として完成し、その試泳式で披露された森好男先輩や筒井善二郎先輩のなめらかなクロールには只々舌を巻くだけであった。五年生になつた頃には豪傑肌の丹羽勝主将（死去）のもとに、小兵乍らもビチビチとした元気な泳ぎをみせる河本郁雄君、親切的なところのある内山寧一君、面倒見の良い中川一三君などと共に对外試合にも参加するが、役割はいつも補欠的であり、リレーでは常にブレーキ役であった。一〇〇米をクロ

一ルでやっと一分二〇秒前後ではこれもまた止むを得ない。

大阪高校（旧制）に入つてからも、醜女の深情けよろしく、泳ぎに対する執着は強まるばかりであるが記録はさっぱり上らない。ところがある。ある時突如として転機が訪れた。高校一年生の冬のことである。どうの昔になくなつたと思うが、当時恵美須町辺りに温泉劇場の様なものが、その地下の温水プールが大阪近傍の大学・高校水泳部の冬期練習場の観を呈していた。ここで偶然始めた背泳であるが、週ごとに一〇〇米で五秒、三秒と記録が縮まっていくではないか。この理由は今でもはつきりは判らない。トレーナーに、最もスポーツマンらしいスポーツマンとして今なお深く敬慕している往年のオリンピック背泳選手故斎藤鶴洋氏を得たこともあろう。また、思春期に声帯部に起る変化が声変りを起させるように、十八才になつた私の体の中で、背泳を効果的に行なうために必要な筋肉系、神経系、呼吸系、循環系などのそれぞれ特殊な部分に偶然一定の変化群が起つたのも知れない。——事実、クロールの方の記録上昇は、この時期の前后を通じて相変らず遅々たるものであったのである。

とにかく、調子に乗ってしまった。対天中戦には突然の腹痛のため残念乍ら出場できず、美しい泳ぎをする鎌倉、水郡、谷田、泉原等の諸公のうわさを後になって聞くに止まつたが、三年生のとき主将として参加した夏のインターハイでは一〇〇米の背泳に当時の高校新記録一分十八秒（当時の日本記録は入江の一一分十二秒）で優勝する、日米対抗大阪地方エキスピジョン大会には出場選手の一人に推される——この大会は何らかの理由で開催には至らなかつたが——といった具合で、母校の水練学校からは師範の免状まで頂戴した。

私の父は少年時代の私を野球や相撲などの大衆スポーツの見物に嫌という程連れていた。勿論、今となつては親心の有難さは身にしみて感じているが、当時の私には逆の効果をもたらした。甲子園

の選抜野球の選手席近くにいつも席を与えられた私の子供心を最も傷つけたのは選手達の愚劣無教養な言動であり、大相撲のます席にして周囲の歓声の中でひときわ高く響く不協和音は幼い心にもあります立派なりわいの者とも思えない女性達の嬌声であった。

他はいざ知らず自分だけは世俗に穢されることのないスポーツマンらしいスポーツマンになりたいというひそかな願望が芽生え始めたのは、中学・高校での私なりに充実した水泳部生活の頃である。日頃高邁な理想を説く親友達が——最も親しい水泳部の僚友までが、しかも対抗試合の真最中にまで——早慶野球のラヂオ放送にうつつを抜かす有様に、どれだけ淋しい思いをした事か。こんなとき、私は救われた思いをさせてくれたのが当時オリンピックで優勝した日本水泳陣を率いて帰国された水連会長故末広巣太郎東大教授が解説式で選手達に与えられた言葉であった。それは、「諸君はオリンピックで優勝したが、たかが他人よりもほんの何秒か早く泳げただけの事ではないか。これからはもとの社会に戻り、善良で謙虚な一市民として生活しなければならない」といった内容のものであった。

両親共に学者の家系で、幼い頃から良くなは判らないけれど学問といふこの世で最高のものがあると思いつこまされてきた私は、小学校の二年生のとき、「大人になつたら」という題で友達の大部分が軍人を、少数が会社員を描いたとき、私だけが髪を分け、鼻眼鏡をかけた理想の夢、学者先生らしい姿を描いたものである。この素朴な理想と、水泳に対する熱意とをどのような形で自分自身の将来に実現させるか、これが大学入学を目前にした私の最大の関心事であった。丸善に通つて水泳技術関係の洋書をあさつたり、父の書棚から運動医学関係の書物を持ちだしたりしたのもこの頃である。父や部の先輩の意見もよく聞き、最後に心に決めたのが、純粹科学への道であった。丁度その頃東大理学部動物学教室で動物生理学への新しい展開が始められようとしていたことであつて、ここを志願し、幸い入学を許された。

学部での基礎教育の期間中、最も印象の深かったのは、三浦三崎の臨海実験所での実習であった。微小なもの、華麗なもの、ひよわなもの、保守堅固なもの……さまざまな生物がそれぞれ測り知れない巧みさをもって、泳ぎまわり、這いまわっているではないか。動物の運動行動の原理を深く、また広く研究していくことは素晴らしいことに違いない——水泳をも含むヒトの運動技術の研究なども、このような基礎的研究が進んだうえでなければ、単に場当たり的なものになりはしないだろうか——私は次第にこのような気持に支配されるようになつた。

動物行動へのアプローチの第一歩として私が選んだ最初の研究題目は最も単純な動物——単細胞動物——の運動反応のしくみに関するものであった。クラゲの筋肉神経系のはたらきについての業績が学位論文となつた。入学以来昨年春停年で退職するまでの四年間、東京大学での学問精進の跡を辿るのが本稿の目的ではない。良き師、良き友、良き教え子に恵まれた私は、誠に充実した、幸福な生活を送ることができた。特に、動物学への私の開眼の場である臨海実験所で、兼任所長として過した最後の数年間の思い出など、尽きることがない。——臨海実験所長会議が機縁となつて、予てから温厚誠実な動物学者として遙かに尊敬申し上げていた金沢大学附属臨海実験所長の益子帰来也教授の知遇を得たのもこの頃であるが、この方が実は天中水泳部の先輩だと判つたときの驚きはひとかたではなかつた。同教授も私と同じように、その日の仕事が終つたあとひとつ泳ぎを、いままお楽しんで居られるそうである。

とにかく、魚類群泳のしくみに関する最近の研究に至るまで、私

自身が学界に対して行なつた貢献は、この学問分野全体からみれば深さからいっても、広さからいっても誠にとるに足りないものである。しかし、純粹学問研究の魅力に取り付かれた私は、気力体力の続く限り、多くの優れた教え子や同学の士に伍して今後も我が道を往きたいと思っている。幸い私は昨年四月新設された埼玉医科大学

に職を得、研究室が与えられた。私は、今までの生涯を支配した運の良さを、そしてそのようなめぐり合せのきっかけとなつた少年時代の水泳の体験を、何か不思議な思いとともに振り返らざるを得ない。この夏には我が大学にもプールが作られることになつて、プール開きには、水泳部長として式泳をやってみたい——泳ぎは、浜寺水練学校仕込みの日本泳法にしようか、腕に覚えの背泳にしようか——などと楽しい空想にふける昨今である。

なお参考までに私の水泳の記録と、それの測られた時期とを書くと次の様になる。

五〇米背泳	三五秒〇	昭和六年七月一日
一〇〇米背泳	四二秒〇	四六年七月？日（現在の実力？）
二〇〇米背泳	一分一七秒二	六年七月二日
五〇米自由型	二分五〇秒〇	六年六月九日
一〇〇米自由型	二九秒二	六年六月一三日
二〇〇米自由型	一分〇九秒八	六年六月一三日
	二分三八秒四	六年六月二七日

## 私の思い出

天中三十三回 中川一三

私があこがれの天中に入学を許されたのは、大正十五年四月だから、今から二十七年の昔話になる。堺市から代表の様にたつた一人きり入学した私は、体もクラスでは最も小さい一人で入学早々は友達もなく、質実剛健で鳴る校風に育つた上級生をながめては、どちらを向いても唯恐ろしくて一入小さくならざるを得なかつた。

それ丈に反面馬鹿にされ度く無くて同じ学年の所謂餓饑大将共とは盛んに衝突して頑張って居った。

当時上級生達が鉄拳制裁の場として居った柔道場（今の食堂のある辺）の裏の三角の空地で、二十数人級友達に囲まれた中央で闘犬の様よろしく自分では一ぱし堂々たるつもりで最も体の大きくて上級生の後盾を持った〇君と雌雄を決したのは入学してまだ二ヶ月程の頃であった様に覚えて居る。

小学校の五年生迄は恐ろしくて海にも入れなかつた私は、堺の大浜で兄に海に投げ込まれたのが動機となつて五年生で五十町、六年生では百町と言う当時小学生としては最長の遠泳には成功したが、貧弱な体で無理をし過ぎて母に随分心配を掛けると言つた始末だつた。

小学生で百町泳げてクロールの真似事が出来れば達人の中に入つた、その当時の事ではあつたが、蛙泳以外に満足にバックもフリーも泳げなかつた私が、入学してまだ日の浅い六月シーズン開始と共に誰一人知つてゐる人も引つぱつて呉れる先輩も居ない水泳部に自分から進んで厚顔にも入部した原因是、先天的に弱少であつた私は天中の大先輩である近所の医師から君は体が弱いからとも大学への進学は無理だらうと言われたことが頭にこびりついて、よし自分の体は自分で改良してやろう、と思う一念からに外ならなかつた。今から思うと伝統に輝く天中水泳部に入部出来た喜びは子供心に何の重大さも感じなかつたけれど、当時あのブールで活躍して居られた諸先輩としては金子（早大）柴田（国学院）筒井（北大）の上級生の外に二年生には実にきれいに泳いで居つた岩住、田中、諫早の諸氏が記憶に残つて居る。

特に金子さんの堂々たる体躯と馬力の有るブレストは忘れることが出来ない。

一年生の頃に水泳部で私が知つたことは、このブールが先輩たる天中生自身の汗と熱意の手に依つて掘られた神聖なものであると言

うことと、先輩森好男氏の日本の活躍をして居られると言うことだつた。

私の天中在校時代と言うものは天中自身の歴史の中でも非常に波らんに富み、逆境に直面した時代で有つた様だ。

と言うのは此の年の十二月、忘れもしない浅村幾太郎先生の熱弁に感激して明日の日曜日は金剛の雪中登山に参加出来ると言う中学らしい初めての経験に張切つて早寝したその夜の九時頃火を発し、土俵の有つた思い出の天中校舎が物理化学の階段教室のみを残して猛烈な風と寒気の中で私の傾到した木造の母校、中庭にネムの樹と鳥有に帰して仕舞つたのであつた。

当時最低学年で有つた私達の学年が最も永い期間不幸な坂校舎生活に甘じねばならなかつた訳だが、最初に移つたのは江の子島にあるローマ時代の廃墟を思わせる旧府庁舎（今の工業奨励館）であり、再転して桃谷の近くに有る女子師範跡（現在の夕陽丘高校）の雨が降ると机をかかえて逃げ歩かねばならぬボロ校舎に移された。

其の都度蟻の行列の様に椅子や机を肩にして或は大八車を威勢よく引張つて市中を行進する天中生の姿が市内に見られた訳だ。

それから昭和五年の春私達がヘッドクラスに進級する直前、グリーンのモダーン校舎が焼跡に再建される迄の満三ヶ年は、文武両道を誇つた天中健児に取つては目の前からブールとグランドを無くした丁度片腕を失つた人の様な苦難の時代で有つたと言える。この困難の中に有つて昭和三年主将斎藤権三先輩（戦死）が準決勝の負傷を押して出場、優勝戦で同志社に敗れたりとは言え全国大会に於けるラグビー部の奮闘は称讃されてよいだらう。当時三年生だった私は甲子園原頭（こんな言葉が有つた）大いに感激したもので有つたが、ラグビーとか水泳とか言うのではなく、吾々学業の重責を持ちスポーツをして来た者にとってこの先輩の偉業を更に考えて見ねばならぬ要素が有ると思つて居る。

それはさて話を水泳部にもどそう。

昭和元年は、大正天皇の喪に服して全国的にあらゆる行事は御遠慮の為、総ての分野に涉って低調で有った様だ。

私は四月八日の二年生への進学式の日にいたゞらをして居つて右足首の脛骨腓骨一本を折つて鳥鷺病院にかつぎ込まれ、春から秋に掛けてのシーズンを無為に終り水泳部の状況は知らないけれど、全然活躍して居なかつた様だ。三年生になって四月から待ち切れず海やプールで泳ぎ始めた。この年の主将は快男児で鳴った丹羽勝さん（北大に入つてラグビーに転向）でスポーツ博士で有名な元大毎の木下さんの御子息の木下治雄（東大）眼科を専攻された河本さん等が自由型。四年生では大東さんがフリー・バッックを泳いで居られた。

三年以下では私と中来田隆二君（学生鳥人のトップを切つた人）、ブレストの藤野君ぐらゐの僅か三名で其の他優秀な素質の人が多く、前述の如き悪条件の為かことごとく水泳部から脱落して部員は全部で七、八名に過ぎないと言う惨状に有つた。

丹羽主将は非常に精神的な人で豪傑振つた所が無きにしも非らず年中裸の上に直接小倉の制服を着て居られたが、この裸が体操の時間や抜打的に行われる服装検査で問題に成つた。この服装検査と言ふ奴は朝礼後突然実施されたもので質実剛健の校風を如実に示すもので、外套の許されなかつた当時の真冬でもシャツは三枚以上は皆ぬがされたし、華美な毛糸のシャツなどもつての外で、一寸贅沢な時計や万年筆、ズボンの裾口の寸法に至る迄不良生徒のゲージにされて戦々恐々だつたが、従つてこの服装検査にからまる傑作奇談は數多かつたが、又日を改めよう。

話は横道に外れたが前記丹羽主将は水泳部の主将で級長で応援団長と言う全校の信頼を一身に集めた典型的な天中健児で私も非常に尊敬して居つた。

毎日放課後桃谷の仮校舎から真直ぐ歩いて今のプールに練習に通つたものだが、この交通に練習時間が極端に制限された。プールの水換え等不可能に近く専ら腕力に頼よつてバケツに物を

言わざざるを得ない始末に、大半抹茶の様に青々と淀んだ水の中でおびただしいボブラのハッパをかき廻してもがいて居たに過ぎない。

従つて大会に出たこともなければ対校レースを行つた記憶もない。然しその年に水泳部員として得た私の収穫は小さくはなかつた様だ。それは主として精神的なものに止まるが、人生意氣に感じることを知つたのは此の時代ではなかつたろうか。

ラグビー部に随分引っぱつて頂いて、冬丈は大いにラグビーを親しんだけれども正式にラグビー部に専念出来ず、水泳部に踏み止まつた原因は、この時代の水泳部の寥然去るに忍びないものがあつたからでも有る。

毎日プールに集るのは唯泳ぐことのみを目的としたものでは無くて借家生活だった私達は焼跡に来て自分の学校のグラウンドに接し先輩が掘つて呉れたと言う貧しいプールサイドに立つ丈で心の安らぎを覚えたものだつた。このプールサイドで仲秋の名月を慕つて深夜スキ焼会を兼ねて泳ぐことを覚えたのはこの年で感銘は深い。周囲の家数も少なく野原の真中に有つて校舎もなければ満足な柵も無く、いたずらに聳えて風に鳴るボブラに囲まれて月影を宿すプールに集つて泳いでは語り、語つては飛込んだ河童達は正に春秋に富んだものと言えよう。

運動部員の誇と自覚を表明する為、銀のT・A・Mのバッヂを作つて呉れたのも丹羽さん達の力で、一つ以上の運動部員を兼ねることに依つて起る種々の弊害を一掃する鉄則を定められたのも此の時代で有つた。

私の一期前には仲々優秀な素質を持つた方が多く、田中、岩住、大東、諫早、福元等々で有るが、仮校舎時代に水泳部に見切りを付けられたのが殆んど練習に来られず私が四年生に成つても、生え抜きの水泳部員は私唯一人で大東さんが稀に見えたに過ぎない。

この一年間のランクは我が水泳部に取つて非常に痛かつたと思う。

私が四年生のときは従つて天中では私が一番早く泳げたと言う訳で、主将としての仕事もせざるを得なかつたと言う事は何としても情けない状態で有つた。

新校舎を与えられると共にヘッドクラスに成つた私達の責任は重大であった。

復興校舎から巢立つ第二回目の生徒では有つたが、雌伏三年を重ねた私の胸の中には天中黄金時代の再建をねらう熱血が鬱勃と沸ぎるを禁じ得なかつた。

私達の脳裏からは常に“天中魂”的三字の消えることがなく、如何に校風を建て直すかが最大の目標であつた。

若氣の至りではき違えた血氣は数多くの失敗を伴つたことはいなめない。鉄拳を振うことや蛮勇を發揮することに依つて他校の連中と盛んに衝突を重ねて見たりしたが今にして思えばよく事なく卒業させて貰えたものだ。

内部的には運動部の結束には非常に力を注いだ。天中の復興は先ず運動部からと固く信じたのである。

私は水泳部の再建は先ず水泳人口の増加と団結に有ると確信した。

先ず手始めに同学年から内山、泉原、山本、吉岡の四君を獲得することに成功したが、これには仲々の苦心を払つたことは事実だが、結果から言つて夫々性格を異にしたこの五人のスタッフのコンビは非常に良かつたと思う。

四年に張間、藤野の二名、三年生は生え抜きの中来田、林、吉元、二年生にはホーブとして鎌倉、仁、徳、兄弟、水郡、伴等仲々良い泳ぎをして居つた。一年生は多士才々、谷田、飯田、藤原、田中、由利、三宅等将来を期待出来る連中が実に和氣あいあいとして総勢二十名に達する、私が入学以来四年振りに水泳部としての体をなすに到つた。

私は私の時代に花を咲かせることの不可能なことを自覚して、心中秘かに、甘んじて礎石たらんとした。

近ければ鎌倉、水郡の時代に、遠くとも谷田、飯田の時代には黃金時代の再現を期し得るものと祈つた次第である。

私はこんな意味で自己練習は早朝の七時から始業までをねらつて正規の練習時間を下級生の叱咤に割いたことが多かつた。

自分自身のオーバーワークでタイムの落ちることも十一月初め霜をスタート台に踏んで泳ぐ不合理も考えて居なかつた。

正月元旦、薄氷を破つて泳いだりして一部の人には軽薄と思われたかも知れない。然し運動部の黒板に『本日寒中水泳有り 水泳部』と誌した誰かのイタズラを半信半疑集つた連中の眼を黙過出来ない狭量と自負が水泳部の名譽に掛けて裸にさせたが、今から考えても後悔はして居ない。心臓マヒでも起して居つたらザッピOKでは有つたろうが、神も哀れを垂れ給わつたか？

弁解がましく恐縮だが、私の時代に於ては記録的と言つて自慢出来る何物も無かつたことは先輩に対して、又後輩の諸君に対しても洵に申訳ない次第で有つたけれど、随分無理をして対校ゲームを行ひ、出来る丈大会には参加して天中の復活を標榜すると共に下の人達に水泳部の有り方の一端を暗示することに務めたつもりで有つた。乞う諒とせられよ。

学校当局でも私達の誠意と団結は大いに認めて頂けたらしく非常に好意の数々を頂いたことは忘れ得ない。

この外私の思い出の中に無果樹と鯉がある。無果樹は何代か後の連中が猛練習の中に楽しみを飾つて呉ることを夢見て丹羽さんの庭から許しを得て移植したものだが誰が食つて呉れたか、又何日の間に無くなつたか知らない。鯉や鮎をブールに放つた最初の動機は忘れたが、この鯉や鮎が一尺近くにも大きくなつてブール掃除の度に水が減つて次第に自由をうばされた頃に水中にもぐつて手觸みにする芸当とスリルを味わうのが、辛らかつた掃除日の最大の楽しみの一つで有つたが、之れは戦死した泉原修君が一番の名手だった。この鯉や鮎も無果樹と同様何時の時代かに居なくなつて仕舞つた。

食つて仕舞つたものやら、それともプールの神聖を汚すものとして何代か後の名主将の命令に依つて放逐されたものか、その消息は私は知らない。或は今のプールの排水設備には適さないのかも知れない。

プールの水換えで思い出したが、私の時代は排水には小さなモーター壹個が何よりの頼りで、このモーターで下手をすると一日も三日も掛つて水を汲み出したもので、モーターがすぐに焼け付くので授業をおっぱらかして、この小さいモーターを重病人扱いに水をかけたりタオルで冷したり油だらけに成つて付き切りの看病にこれ務めた故吉岡五六、名マネージャーの神の様な姿は今も私の眼底に残つて居る。

又水を入れると更に大変だった。給水管が小さかつた為、深夜にでも入れない限り毎に注水すると近所の家々は水が出ない。天中前の銭湯は商売が出来ない。吾々としても命より大切なプールの水だ。水争奪戦にからまる珍談奇談の数には同じ体験をされた方も多いことだから、皆さんのお任せしよう。

天中水泳部に対する私の思い出の糸をたぐると全く際限がない。

私にとっては宝玉にも例えられる人生の一頁だ。恐らく嘗て水泳部に籍を置かれた皆様に取つても同様で有ろう。(二七、三、五記)

(中川先輩ご病気ご療養中のため、改めてご寄稿をお願い出来ずお許しを得て、二七年の会誌に掲載されました本文を転載させて頂きました。編集者)

普耳もない上本町の仮校舎で一年半以上もおられた水泳部の先輩諸兄は、どんな練習をしておられたかは聞いていないが、恐らく大変苦労されただろうと想像しております。この時代が成績の上では水泳部のどん底時代とも言うべきものではないかと思います。しかしその当時の先輩は何一つ愚痴をこぼさず、実に和氣あいあいとして部の結束をくずす事のないよう努力され、時には部員一同が遠く奈良辺りへピクニックを楽しみ、冬には水泳部でラグビー、或は柔剣道をしては、体力の維持と、部員相互の結束に注意が払われたようです。

こんな具合で私も遂に五年間水泳部のこの魅力の虜になつたような次第、実に単純な理由です。

その当時の先輩の中には、ローソク、カッパ、スルメ、チャマ等実にユーモアに富んだ徒名の人気者もおられ、このうち二名は亡くなられ、其の他、山本、吉岡、吉本、張間、中来田等の諸先輩も亡くなられた由、水泳部名簿の物故者三十名中十四名の方々が私の在校中に活躍されていました。

しかもこれ等の多くの方々は大東亜戦で戦死されたと聞いております。

天中の水泳部のどん底時代を救い、更に国の危急存亡に生命を賭して戦われた諸士の勇気に深く敬意を払います。

今頃の教育ママには何と言われようとも、部としての団結力の強さを誇り、正しい正義観をもつことが天中水泳部の伝統として残っているものと確信しております。

## 伝統

天中三十六回 鎌倉仁

私が天中へ入学した時は、昭和四年天王寺の校舎が全焼した翌年で現在の校舎が完成した年だった。

## 五十周年記念祝賀会のこと

天中四十二回 指輪 富二郎

栄光ある天中水泳部に僅か一年間しか在籍しなかった、謂わばアウトサイダーの如き小生に桃陰水泳クラブより応分の協力をとの便りが来たのは確か昭和二十四、五年であったと思う。爾来本当の応分で何時も心苦しい思いをし乍らお付合い願つて先般の五十周年記念祝賀会に至り、初めて中学一年生の次男を連れて出席した。四十一期生と言うと昭和十五年卒業でその後この母校を訪れたのは一、二回。

それも運動場の隅々まで歩いた事もなく、先づ懐しのブールが西南詰から東南詰の反対側に移つたので追憶が絶たれた。然しブールサイドには偉大なる先輩や、嘗ての紅顔の美少年（今やべん髪霜を置く貴様）が多勢相見え、やあやあの挨拶やら握手やら。ここで何か気分がほぐれた様で急にフィルムが三十数年前に巻き戻された思いがして、暫し陶然たらざるを得なかつた。忠ヤン（ラグビー部の村田君。現医博）がブールサイドの来賓席からこっちへ來いと手招きして呉れたので同席して久闊を謝した。その時横の見馴れんオッサンがカメラ片手に、「ヨオー、サスカ」と顔一杯の笑顔を送つて呉れたがどうしても思い出せん。直ぐさま忠ヤンから「アレ、ポペイやがな」と助太刀が入つて握手と成つた次第。彼とは、卒業以来初めてである。往年の名選手西岡君も戦争と言ふ大きな犠牲のために健康を損い既にその影を留めないのは、淋しい限りであつた。後刻馳せ参じた浜田君（主将。現医博）も「あのボパイは耳が悪いから筆談でないと通じ難い」と村田君から言われ、仰せの通り恭しく「某は浜田通夫である」とベーバーを差し出した処、「阿呆、そんなことよう判つとる」と。大笑いであつた。

そういうする内親子リレーの番組となり折角来場の際頂戴した水着もつけて見たい気になりエントリーに及んだ。扱てスタートが切られ吾が息子（アソコに非ず）がバタフライで水を切つてぐいぐい迫つて来る。隣のスタート台に座つている相手に「あんたとはどないしてはんねん」と様子を伺うと、「未だきまへんねん」。見ると小学生の坊やが浮き沈み懸命の力泳。「ほんならお先に」と無慈悲にも先に飛び込み一心に得意のプレストを切つたが、どうしたことかそのお隣が先着であつた。呼吸をはずませて席に戻つた小生に忠ヤンは、「サス、沈まんだけ偉かつた。御苦勞」。然し鎌倉さんの泳ぎは、小生が一年生の時（鎌倉さんは確か五年生だったと思う）ブールサイドから喰い入る様に瞳に焼き付けた当時の美しいホームその儘で、鮮明な記憶は終生消え失せないと言う神秘さえ感じた。

次に思い起こしたのは夏休みの練習中塩川君より相撲の挑戦を受けて（時に小生三年生。彼は一年生で、あんこう餅の様に丸く黒く歯だけ真白で愛らしかつた）さあ来いと砂場で汗と砂で泥だらけになつて取ること五十余番。如何せん小生チビとは申せ矢張り二年の違いで力に差のあるのは当然、ちぎっては投げとまではいかなくとも、投げとばし、転がし、押し倒し、幾ら取つても参つたのまの字も言わん。終には小生から停戦を申入れたが、その時炭団子の様になつた塩川君を眺めて、「こら偉い奴になるぞ」と感じ入つた。果たせる哉。好漢自愛を祈る。

さてこうして数々の面白い競技等が充分に我々を喜ばせて呉れたが黄昏と共に閉会となり、やがて賑々しいパーティーに入る。おでん片手にブール、酒。しぶき立つたブールの水は今や月を映して静止している。お父さん、お母さん、子供、現役入り混つての家族的な雰囲気。誠に感動深い半日でした。次回の六十周年記念を期待す。

今回の準備委員の方々に深い謝意を表します。

## 先輩のこと

天中三十八回 泉原 嶽

戦後の学校生活は、すっかり変ってしまったというから、私たちにはちょっと想像がつかないが、昔はいわゆる「先輩と後輩」の関係はきびしく、又それだけに、お互いのきづなも大変強かつたようだ。

私に関して言えば、大先輩の皆様は勿論のこと、一期上級の谷田さんや藤原さんは特にお世話になり、お一人の家に寄せていただいて、麻雀をしたり、酒を飲ませて貰ったりといった色々楽しい想い出を持っている。(そう言えば、藤原さんのお父さんの経営されていたお店の野球チームに加えていただいて、対外試合に出していた記憶もある)

昭和十四年に学窓を出て、今の会社にはいったが、嬉しいことに、ここで又京都薬専(当時)を出られた藤原さんといつよになった。お互に新入社員としての喜びをわかつたが、間もなくそれぞれ兵役に服することになり、そして消息のわからぬまま、終戦になつた。

私が昭和二十一年に復員して出勤したところ、どうやら藤原さんは満洲からシベリヤ送りになつたらしいという。同期入社の誰彼の不幸など悪いニュースがはいると、生死不明であるだけに、何となく不安の念を覚えたことを今も思い出す。

それが、その翌年だったか、ひよっこり元気な顔を見せられて、兎に角その無事を喜び合つた。それからこの二十数年間、勿論職場も違い、私が東京に転勤したり、藤原さんも金沢勤務になられるなど、お互いに環境の変化もあったが、それでも何かの機会を捉えては、酒を酌みかわして久闊を叙し、昔話に花を咲かせることが出来

た。

お互いが在阪勤務になつてからは、時には谷田さんをよぼうじやないかというようなことで、私も一度ほどお供させて貰つたこともある。お氣の毒なことに、藤原さんは戦中戦後の無理がたたつてか眼を悪くしておられるが、つい先日もお席に立寄つたところ、大変お元気で、御令息(当社の名古屋支店勤務)の御結婚のことなど話をしておられた。

既に五十も半ばを過ぎた我々だが、水泳部を通じて得たこのきづなは、いつまでも大切にしたいものだと思っている。  
(この項は、指輪氏の項と順序が逆になりました。お詫びいたします。編集者)

## 栄光の昭和十四年

天中四十一回 浜田通夫

かつて自他共に許した紅顔の美少年も、今では自分の娘と一緒に街を歩くにもいろいろクレームをつけられる程变成了つた。(自分ではそれほどとも思ひぬが……) 三十四年の歳年、「光陰矢の如し」と、しみじみ感じる此の頃です。

強烈だった思い出も、年と共に遠く震んでゆく中で、不思議と天中水泳時代のことは、鮮明に残つております。

私の水泳部生活の中でも最も充実していたのは、すばらしい監督、よき同僚、よき後輩、に恵まれていた昭和十三、四年の頃でした。スペルタ教育に徹しられた若宮監督時代、合宿練習のきびしさに堪えかねて、誰言うともなく貴兄のことを鬼の若宮——鬼若監督と呼ぶようになつたことを、ご存じでしたか。(失礼)

そして貴兄の愛の鞭の成果は、府下大会優勝への導火線となり、

私達の心は火の如く燃えたのです。

明けて昭和十四年、私は選ばれて主将になりました。鬼若監督からバトンを受け継がれたのは、皮肉にも剛とは全く対称的な柔の新監督でした。貴兄の、「和を以て貴し」を信条とする卓越した指導力は、現役諸兄の奮起と相俟って、府下で不敗を誇る茨木中学を庄しい優勝の栄光は私達の頭上に輝いたのです。

それはまさに天中水泳部歴史始って以来の快挙であつたと聞いています。幾年月経るともあの日の感激は、今も私の脳裡に鮮烈に生きております。

#### 過ぎし日の諸君

阿部君 百米自由型決勝でみせた君の老巧な泳ぎに脱帽。

西岡君 君のすばらしい馬力ある泳ぎが目前に浮んでくる。

伊藤君 君は変り者だったなあ。

田中君 お互いによく頑張ったものだねえ。

楠本君 八百米自由型決勝でみせた君のものすごい「ラストスペ

ード」強剛西岡君を最後の五十メートルで破った時の「スタン

ド」のどよめきと感激に、拍手喝采をおくる。

塩川君 早稲田で花を咲かせた君、今オリンピック選手養成と聞

形部君 若くして何故死んだ。君のユーモアにとんだ行動は、苦しい合宿をどれだけ楽しめてくれたことか……君のご冥福を祈る。

三十四年前の優勝に乾杯しよう。

## 天中時代を想う

天中四十四回 楠 本 僕

私は戦争の中で教育を受けた。小学校に入った昭和六年は満洲事変がはじまつた年であり、天中に入った昭和十二年には日支事変が突入し、昭和二〇年大学に入学した年には、慘憺たる敗北が待っていた。私は人間の善意を疑うものではないが、人間の知慧はつくづく限りあるものであることを、今に至るも深く想う。暗い時代であった。

暗い世相とは別に、私の天中時代は、稚氣駭蕩し、天衣無縫、春秋を謳歌していたといらるべきであろうか。水泳部は、新、浜田時代を迎えるとしていた。多くの先輩が語られる如く、大正末期から昭和一ヶタ時代にかけては、茨木中学が全国に君臨した時代であった。私は天中を出て、第一高等学校の水泳部に入ったが、その八年史にも次のような一節がある。「大正十年前後から競泳にクロールが本格的にとり入れられるようになり、これを用いて自校のプールで組織的な練習を行つた茨木中学のチームが圧倒的に強くなり、ブルーを持たぬ我々の及ぶところでなくなつた」と。ちなみに明治大正にかけて第一高等学校運動部はその道の先覚者を以て任じていた。この時機に我が天中は、齊藤先生を迎え、阿部先輩等がクロールを浜寺の海で習い、学校にプールが作られ、大島、中野、森、益子時代が生れて、我が水泳部は正に全国的に活躍した。とは言え茨木は圧倒的に強かった。昭和八年、当時の日本水泳界は世界の王者であったから、王者日本の母体である茨木中学を二〇〇メリレーで撃破した天中勢の自負は、想像に余りあると言えよう。輝かしい勝利の一駒であった。我々はそれを鎌倉、水都時代として今に記念し

てゐる。鎌倉、水郡時代に二〇〇メリレーで茨木を降すことは出来たが、総戦力に於てはなお大きなひらきがあった。当然総合力で圧倒するということが、天中水泳部を継ぐものに課せらる目標であった。これは昭和八年桃陰水泳クラブの設立によって特に厳しく後輩に受け継がれることになった。私はそういう時代に天中水泳部にござ介になつたことが出来る。

会長に阿部幸作先輩、会務に泉原巖先輩、現役指導主任に谷田一雄先輩、コーチに若手チャキチャキの先輩というのが、私の天中時代の桃陰水泳クラブの指導陣であつたようだ。かくて打倒茨木を目指す天中陣営が一步一歩整備された時代であつた。私の知る限り茨木を倒せる可能性のある総合力を備えた天中チームは、昭和十三年若宮監督、新主将の時代にカマ首をもたげ始めた。大事なことは、現役幹部が目的意識に奪い立っていたことではなかつたかと思う。さればこそ、翌年、一代の名コーチ新先輩の下浜田主将揮下の天中全軍が茨木を一気に押し切ることが出来たのではないかと今にしてつくづく想う。茨木は既に全国の覇者ではなかつたが、我々にとっては越えねばならぬ高い関門であった。實に鎌倉時代から六年の歳月が経過していた。雷鳴耳を圧し閃光眼を射るのつく雨中の真田山ブールでの府下大会フィナーレの八〇〇メリレーはまさに激的で、茨木に文句のないとどめをさした全く忘れ得ぬ青春の一駒であつた。

然し、茨木中学はなお強く、翌年は事もなげにやり返された。その後を継ぐ我々は優勝盃を奪還することに当然凝つて火の玉となつた。桃陰水泳クラブ派遣阿部忠雄コーチは、ブールサイドの目立つところ各所に自筆“打倒茨木”的墨書きをかけ、練習前には宣誓、合宿時には日夜正坐瞑想を命じ、戦闘心の昂揚をはかつた。

当時、昭和十六年夏は、大東亜戦争勃発直前であり、昭和十二年日支事変以来打ち続く戦乱と軍事経済で平時の国民生活は既になく、若宮監督、新主将時代からなじみの旅館は店を閉じ、もとより天中

の近くに学生の合宿など受け入れてくれるハタゴは少なかつたのであるから、阿部監督ならびにこれを助ける我等の名マネージャー仏っあんこと片桐マネージャーは合宿所探しに東奔西走した。仏っあんが天中東の軒は傾いてないが、二部屋ある二階の片方が下方に傾いているオンボロ空家をそれでも家主さんの好意で獲得して来ててくれたのは、予定の合宿がもうそこに迫つた頃であった。かくて阿部監督の下、仏っあん、阿保、福岡、一年下の国井君等のまかない方に腹一杯喰わせて頂いて合宿訓練は始まつた。先頭に立つて練習と戦うもの、自由型の主力塩川副将ことポイント、村田のチュウヤン、永木のカン、それに楠本、平泳の元締山内ことビーヤン、背泳のキタハこと刑部、これに統いて三年生の深尾、松浦、高木、二年生の岡田兄、三木、鈴木など。一年前血涙をのんだ田中亮前主将もストップウォッチを握つての応援、叱咤激励である。練習と戦うものにとってブールは死の如く重く、泳いでいる時以外はブルサイドで死んだよう休息をむさぼつていたことを今も想い起す。

かくて再び茨木に圧勝し、優勝の大盃を母校に持ち帰ることが出来たが、祝賀会を今アベノ橋森口先輩の富士屋二階の奥の部屋で持つた時に、水泳部歴代随一の名部長北川先生は、なみなみと注がれたサイダーが溢れる優勝盃を両手でかがげ、「この栄光を子々孫々に伝えん」と感激の銘句を残されて乾杯された。——これは岡田兄先輩が覚えていて先般私に激的な瞬間を思い出させてくれました——

以後、翌年再び優勝盃は茨木に取り返され、翌々年山内監督、深尾主将の時に三度、これは完勝という形で取り戻すというシーソーゲームを茨木と繰返し、敗戦を迎えることになるが、戦後茨木は完全に脱落する。我が天中は、岡田兄、大西、盛岡（旧藤村）、丸井、三田先輩などの指導活躍により、府下に於ては常勝敵なく、水球では、松本、安藤兄、小泉、山本等の時代に全国優勝し、新、浜田時代の実力全国二、三位以来の夢を実現するという偉業まで成した。

オーキ、セイセイコウなどその後の名門の未だ搖藍時代で、天中・天高勢の敵ではなかった時代であった。

この後、天高水泳部は一時期沈滯期を迎えるが、これにテコ入れ

すべく桃陰水泳クラブの活動が昭和二十六年より組織的に復活し、十河、竹林時代が生れることになる。我々の研鑽の目的は勝つこと

にのみあるのではないが、負けることを潔としない以上、勝つた

ために努力する。この努力が生んだ歴史はそれを刻んだもののみが知

る観喜と痛苦に満ち、想い出は尽きない。昔のプールのプールサイドには当時いちじくの木が一本あった。秋シーズンオフには少しだが実がなった。練習のないうららかなプールサイド程我々にとっていいこの場所はなかった。その時の童顔の数々は今なお脳裡に鮮かである。かけがえのない一時期であった。最後に私が水泳部にお世話になつた時代のプールサイドの名優の俗称を列記させて頂いて結びとしたい。

カニさん、ワカハシ、ターチャン、クモ、アカテン、ボバイ、ヤキトン、トモスケ、タケ、ゴンボ、ゲンゾウ、ポイント、ブツ、ビビンチョ、チニーヤン、ギボン、アボ、カン、キタ、オバ、アイキヤン、クニイ、ボラ、チヨウセン、タイリク、コーダ、ビロー、オカッペ、ミキ、ダイロク、オーニシ、ナベ、マスダ、フジワラ、トウソン、サンコ、マルキュー、ワンタン、カメ、タナカ……懐しい限りですな。

## 飛沫を浴びて

天中四十五回

若山克己

私はかぶつた。いとしいしぶきを、

楠本君が、TURNした時に、

でも、とても気持よく。ジャーンとくるものがあった。

どうも、あの時私も口走っていた様だ。「頑張れ！」と。

これは触覚的伝達かなあ！ そこから視覚へと、私の脳裡は震う。あつた、あつた。あの楠本君の泳いでいる時の横顔だ。

私は無言でみつめていたっけ、

そしたら、おかしな事もあるものだ。

私達のある時期に、横に寝ていた後輩のS君が、

「明日。出陣します。もうおそいですから、此でやすまさせて戴きます」

「先輩。オヤスマ！」あの時のS君の顔が……、それにDOUBLERてしまつた。

そして、たくさんの友人の顔、顔が……。せまつてきた。

「元気でやつて来い！」 サヨウナラ。サヨウナラ。

此で好いんだ。俺達は！

あのしぶきを浴びてあれから三〇年は経つた。

それなのに、この前のプール祭の時、私はかぶつた。あのいといししぶきを、

又しても、楠本君が飛び込んだ時にさ、

これこそ。過去。現在。未来へと真直ぐに伝えてくれている。人間と人間の生きていく、紳の様なものではないかなあと。

その時、私の胸裡を熱いものが走つた。

今、此こそみんなが求めているものなんだ。

再び、激しく私の脳裡は震えた。

（後記）天中、天高水泳部創立五十周年記念オメデトウ！ そして仲間共アリガトウ！ オレも頑張るぜ！

中学時代 すっかり忘れました。  
五十周年記念 二十五米平泳

林

繁

ブル・サイド

四十八期 丸井久弥

私は三年生の昭和十五年夏に水泳部に入部し、病気のため、冬に退部しました。この間、多少は泳いだ記憶もありますが、それよりも、ボバイことN先輩の足を摩擦する役として、N先輩から、「お前の摩擦は一番良く効く」と何時も賞められていたことや、その年の秋、府下中等学校競泳大会が真田山ブールで行われ、一位であつたN先輩を二位の現K会長が追上げて来た際、天中水泳部の応援席は何れが一位でも同じことですから声もありませんでしたが、観戦の女学生席から大変盛大な応援の声がきこえたというような記憶の方が鮮明という水泳部落第生でありました。尤も私と水泳とは縁が切れず、高校の時、少し泳ぎ、その後もマイペースで泳いでいるわけです。昭和二十六年頃の思い出として、当時、私は神戸家裁の判事でしたが、庁舎が新設されることになりましたので、私は水泳の必要性を力説し、裁判所にもプールを設置されるよう孤軍奮闘しましたが、実現に到りませんでした。思い出として残つております。

當時（昭和十六年）の水泳部では先輩や上級生を呼ぶのに多く綽名を使つた。先輩には「さん」づけで、かにさん（三十七、谷田一雄さん）、たーちゃん（四十一、新保さん）、くもさん（四十二、浜田通夫さん）、ごんちゃん（四十三、田中亮さん）が居られたがボパイ（四十一、西岡三郎さん）のように「さん」がつけにくの方も居られた。今様に言えば中学一年生の子供が、高校二年生から大學生の先輩に向かって綽名で呼ぶのだから大胆そのものである。くっさん（四十四、楠本脩さん）、ぶつあん（四十四、片桐嘉雄さん）、びーやん（四十四、山内一衛さん）、ちゅーやん（四十四、村田新三さん）、ぎばんちゃん（四十四、福岡文夫さん）、おぢ（四十五、形部正忠さん）、おば（四十六、深尾郷一さん）は呼び易く、ポイント（四十四、塩川美幸さん）、かん（四十五、永木剛さん）、あいきやん（四十六、秋山立礼さん）、大陸（四十六、岩橋襄一さん）は呼び捨てなので気が引けた。とても呼び辛いのに、ぼら（四十六、高木修さん）、がんくび（四十六、甲田博和さん）、朝鮮（四十六、林一郎さん）、びこう（四十六、尾高元さん）が居られた。その点名前で呼ぶ方にはすべて「さん」がついた。三十九森口（信幸）さん、四十四、阿保（有恒）さん、四十六、国井（吉隆）さん、四十六、松浦（清一）さん、四十六、藤崎（浩）さん、

四十六、池上（貞男）さん等が居られた。

一年の方や同輩は綽名で呼ぶのが自然で、おかっぺ（四十七、岡田享三さん）、さんきち（四十七、三木吉春さん）、まっさん（四十七、増田正美さん）、ちょうかい（四十七、大西実さん）、だいろく（鈴木大六さん）、ちびちやん（四十七、真鍋昭一さん）、すぢ（四十八、田中昭夫さん）、さんこう（四十八、三田豊造さん）、わんたん（四十八、渡辺元さん）、がさ（四十八、佐賀久雄さん）、えっち（四十八、橋本宏さん）、鼻（四十八、大北俊美さん）、とうそん（四十九、盛岡祐弘さん）と、なかなかの大部隊であった。

さて入学してラグビー部に入りたかったが、父親に反対されて迷っていたとき、「水泳部の上級生は皆ええ人やで」とすぢに勧められて入部した。ところが金槌に毛が生えた程度ではどう泳いでよいのか、恥ずかしながら横泳ぎで出発した。見るに見かねたごんちゃんとクロール泳法を手とり足とり教えて貰って、何とか恰好がついた。五月から梅雨期にかけての水球の練習、それが済めば九月の府下大会に向かって競泳の練習と、辛い苦しい事が多日日々ではあったが、それらを吹飛ばす明るい雰囲気の練習風景であった。三年生の初夏に少し身体を壊したのでそれ以後はマネージャーの手伝いが本職になった。従つてプールサイドの水泳部員であった。試合の日の一年生の仕事はレースから上がつて来た上級生を揉むことであるが、風変りなのはびーさんで「遠慮せんとどんどん踏むんや」と発破がかかる。何時も下級生を可愛がるびーさんは無茶苦茶に踏めたものではないが、とにかく身体中を踏むと、「よしおおきに」で終つた。打倒茨木を果した良い年であった。体育大会の最後に運動部の行進がある。ところが一年生には威儀を示す鬚がない。こんな時には頼む王様あいきやんが助けて呉れる。「お前等はつけ鬚や」というわけで、禪の横から芝生を入れて貰つて胸を張つて参加した。学年が進んでも、生まれつきの慌て者の私は、いつも上級生から

お叱りを受けていた。プール掃除の日に「はわけ、はわけ」のかんに「まるきゅう、上がって来い！」カルキをとけ」と言つた調子である。三年生の時に申し合わせて、「今後上級生をさんづけで呼ぶことにしよう」と決つた。

ところが急にさんをつけるのもてれ臭く、おばにさんづけで、おばさんと呼んだら、「もうやめた」と一分も実行されなかつた。この頃コーチの目を盗んで練習中にコースロープを引張るのが流行した。この年の府下大会決勝時に天王寺と茨木の選手がラストで競り合つた。

この時ゴール寸前で日頃の癖が出て、ぐっと一引き差がついて、タッチの差ならぬロープの差で天王寺が一着になつた。練習の賜物で、余程引き方が良かつたのか、審判氏は気がつかなかつたが、判定が出るまで息を殺したものだ。一部、二部両方優勝の輝かしい年であった。部員が充実して数年は連続優勝が可能であつたが、惜しむらくは第二次大戦の風雲が急になつて府下大会も中止になつた。先輩方は学徒出陣され、楽しい土産話を持帰る訪問も絶えた。道場であるからと一礼して入つたブルも学徒動員で荒れるにまかせた。第二次大戦が入学の年に始まり、卒業の年に終ると言う厳しい時代であったが、名校長ごんばさん（田中栄一郎先生）と水泳部の御蔭で、自由闊達な中学生生活を送らせて戴いた事は、今この自由主義の時代にひしひしと蘇る。この事を肌で感じさせようと、毎年ブル祭に娘と息子を連れて行く。下手な説教より実地教育である。「天高はええ学校やな」と子供達。「うん、大阪で一番ええ学校や」と自分の事は棚に上げて、親爺の威儀を保つてゐる此頃であります。

## 先生、泳ぎじょうずやなあ

天中四十八期 渡辺 元

昭和二十五年、大阪高等学校（旧制）卒業後、小学校の教員になつた。

以来二十三年、その道を歩いてゐる。

昭和四十二年、私の勤務校にも、ブルーができたので、「よし、みんなが泳げるようにしてやろう」と、新体連が創り出しつつあった。「ドル平」泳法に学びながら、水泳指導に打ちこんでいる。

つい最近、教室から職員室への道すがら、階段を並んで降りていた、二年生の子が、「先生、泳ぎじょうずやなあ」と、ほめてくれた。

「うん、中学生のころ、水泳部で泳いでいたからなあ」と、答えながら、私は、遠い昔の天中時代を思い出したことだった。ちょうど、そのとき、原稿の依頼が届いた。

私が、一番鮮烈な印象として、今も思い出すのは、私が一年生当時、五年生だった塩川美幸さんが、手にしていた一冊の本をめぐつて、先輩たちが話し合っている光景だ。

会話の内容を、具体的にはおぼえていないが、

「スケベエなことが書いてある本を、うれしがって読む、やらしい奴だ」

「むづかしい、大人の本を、おもしろがって読める、えらい奴だ」

「いうような、ひやかしの立場と、尊敬の気持がいりまじった会話だったように、おぼえていいる。記録を目指して、みんなではげまし合いながら泳いできた私にと

けれど、その中で、楠本 健さんが、ややきっぱりした口調で、「こんな本を読むことは、大切なことだ」と、いったことだけは、はつきり覚えている。

尊敬のまなざしで見た、塩川さんの表情と、その本の表紙に記された、片岡鉄兵という著者名は、今も鮮やかだ。

創立記念日だったかに、陸軍士官学校と、海軍兵学校（共に職業軍人としてのエリートコース）へ進んだ先輩たちを、朝礼台の左右に、ずらりと整列させ、

「見よ、天中のこの栄光を！」

と、校長が叫んだような、それを聞いて、私も感動の涙をこぼしそうだったような、軍国主義的風潮の中で、文学＝人間の真実の大切さを、私にずしりと教えてくれた先輩たち、そのことを保障していた、水泳部の自由な空気に、どれ程感謝しても、しきれない思いで一杯である。

私の水へのあこがれは、昭和二十年、敗戦の年に大高水泳部へ私を駆立てたが、これは栄養失調で肺を病むことによつて、断ち切られてしまった。

しかし、自由な気風へのあこがれは、今もなお、私を支えてくれている。

昭和四十七年六月、日本列島改造を支える人的能力を開発するため、新日本製鉄や、三菱化成など、独占資本の代表者で組織されている、中央教育審議会が出した「答申」に象徴される、今の教育の歪みを、根っここのところで、きっぱり断ち切つていくために、私は力いっぱい仕事をしている。

「答申」は、5%のハイタレントと、九十五%の

「おれは勉強ができなかつたのだから、安い賃金でもしかたない」と、あきらめて、だまつて働く労働者に、子どもたちをふるい分け機関に、学校を変質させようとしているからだ。

つて、これは、許しがたい人間の冒瀆である。

どうか、先輩諸氏よ、勉強がわからなくなつて悩んでいるわが子に、

「お前が、勉強をわからんよになつたのは、お前の頭が悪いせいでも、お前が遊びすぎたせいでもない。それは、中教審『答申』のせいなのだ」

と、話してやつていただきたい。

## 丘に上つた河童

天中四十九期 山田博

校門が、いつ變つたのか、軍隊の營門になつて、歩哨が一人銃もいかぬしく立つてゐる。

その一等兵だか、二等兵だかに、一々敬礼をしなくては、自分の学び舎（実は遊び舎であつたかも知れぬが）の門をくぐれない、なきない時代であった。《小生の入学は、昭和十七年》

その上、プールの一角は炊事場として占領され、当家の主が、留守を幸に（学徒動員で軍需工場へ駆り出されており）学校中を、思ひの儘にしている。

たまの工場の休日に、学校に帰つて、泳いでみようとする、ブルーは汚れ放題、学校当局から始終、やかましく言われているが、昔の日本の軍隊なんものは、仲々民間人の思い通りにならない。併し、私にとつて、軍隊も人の子、まんざら捨てたものでもなかつた。

ある暑い日、動員先の、工場の帰り、泳ぎに寄ると、

「学生さん、御苦労やな。おっさんらも、泳がしてもうかわりに、晩めし食つて行けや」

と言つて、出してくれた、軍隊獨得の、アルマイト食器の中は、肉めしである。

将校以上の美食をしていた、炊事当番の役徳だろうか、銀シャリもさる事ながら、肉などと言うものは、民間では、金を出しても、買えないものになつていていたから、そのうまかった事。

やがて終戦、吾々は学窓に戻つた。併し学校は、廢屋寸前に荒され、教科書はなし、豆粕、ナンバ粉パン、芋のつる等々。現役諸君を始め、昭和二桁以後の方々には、耳馴れぬ言葉、これが吾々の主食であつた。

併し吾々には嬉しかつた。いやな試験もあるけれど、学生が学校へ帰つたのである。当然と言えば、当然だ。

放課後、プールで泳げるのだ。いつか私は、最上級生になつた。五年間、水泳部として何をしたのだろうか。

元来、神經の鈍い私は、満足に泳げず、まともな学問もせず。でも私は、天下の天王寺中学の水泳部の、出身である。これは嘘いつわりではない。

泳げなくとも、私はこれを自慢にしている。  
妻にも、子供にも。

天中五十期 今立源太郎

前略 御免下さいませ  
桃陰水泳クラブのお世話 有難うござります。

主人

今立源太郎、昨年十月より約一ヶ年の予定でヨーロッパ留学中でございます。その上、現在チロル方面とかいうだけでアドレスも分りかねますので、誠に申し訳ございませんが、此度は勝手させていただきたく御願い申し上げます。十月十日帰国予定でございます。よろしく御願い申し上げます。

かしこ